
バカとけいおん！と召喚獣

直井刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとけいおん！と召喚獣

【Nコード】

N4050Z

【作者名】

直井剗那

【あらすじ】

バカテスの文月学園にけいおん！のメンバーたちが入ってきて、オリ主や明久たちバカテスキャラと軽音部で学園生活を過ごしていく物語です。

この物語の設定？

この物語は『バカとテストと召喚獣』の二次創作です。

また『けいおん！』とのクロスものです

オリ主が幼馴染の明久ともう1人の幼馴染と

秀吉、雄二、ムツリー二等のFクラスメンバーやAクラスメンバーと

そしてけいおん！の唯・澪・律・紬や憂・和・梓たちと

楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。

バカテストとけいおん！の話を混ぜながらの話になります。

また、この物語は明久たちが入学してからの物語になります。

1年次はけいおん！メインの物語で、

2年次からバカテストメインにしていきたいと思っています。

物語設定？

この物語は『バカとテストと召喚獣』と『けいおん！』のクロスものです

設定

- ・オリ主が明久たちバカテストメンバーとけいおん！メンバーと文月学園にて日々を送っていきます。
- ・明久はもちろんの事、観察処分者です。
- ・オリ主と明久が軽音部に入部します。

原作との変更点

- ・明久は姫路に恋心を抱いていない
- ・開始が2年時ではなく1年時からなっています。
- ・なのでオリ話になる可能性があります。
- ・また、1年時はけいおん！メインでいき、2年時からバカテストメインになります。

また書いているうちに変更する場合があります。
それでも良い方は呼んで頂けると嬉しいです

プロローグ 天然さんとの出会い

まだ肌寒い3月。俺達とはある高校に向かって歩いてた。

智也「……………」

陽一「ハア……………」

智也「……………」

陽一「ふう……………」

明久「……………」

陽一「あああ……………」

智也「…おい」

陽一「…なに？」

智也「さっきからうるさいんだけど」

俺は隣りを歩く俺の悪友である『春原陽一』に向かって言う。

陽一「しかたねエじゃん！！緊張してんだから！！」

心臓が破裂しそうな勢いなんだよ！！

だから緊張してんだよ！ビビってんだよ！」

智也「…落ち着けよ。日本語がおかしいぞ。」

あと急にテンションあげんな…かなりウザいから」

陽一「ウザいとか言うなよ！傷つくだろ！！」

……はあ。つうか、なんでお前そんなに落ち着いてんの？
今日が何の日か分かってるのか？」

明久「高校の合格発表の日だよな」

そう。今日は文月学園の合格発表の日だ。

陽一「そうだよ！なのにアナタたちはそんなに落ち着いてるんですか！？」

フツッ緊張するもんでしようが！！」

智也「俺はお前と違って受かる自信あるしな。

それに明久を見てみるコイツだって落ち着いてるだろうが」

陽一「うわッ！ウゼエ！ってなんで明久も落ち着いてるんだ？

明久だってあまり成績良くないだろ？こっち側でしょうが！
？」

明久「まあそうだけど…ここまできたら腹くるしかないしね」

智也「明久だってこうなんだぞ。ほら、さっさと行くぞ」

陽一「ハア。あいよ…」

今日は俺達が受験した高校の合格発表の日だ。

多くの中学生達が歓喜に湧いたり、悲しみに涙する日である。

だから普通は陽一のように緊張するんだろうが、（コイツの場合は

異常だが…)

俺は普通に合格できる範囲だったし、試験も解けたから大丈夫という自信がある。

そんなことを考えてたら高校に着いた。

陽一「やべ〜着いちゃったよ。ヤバイよ？マジヤバイよ!!」

智也「何がヤバいんだ。いいかげんハラくくれバカ」

明久「そうだよ。それに大丈夫だよ。」

僕達智也に教えてもらったんだから大丈夫だよ」

今回の受験のために明久と陽一は智也に勉強を教えてもらっていた。自慢じゃないが中学の時は成績は上位だったからな。

流石に合格発表の日とあって学生が多い。

おそらく合格したんだろう、友達同士抱き合って喜んでいる者、嬉し涙を流している者、ケータイで笑顔で電話している者などがそこにはいた。

陽一「なあ智也君お願いがあるんだけど…」

智也「……なんだよ？気持ち悪いな」

陽一「俺の代わりに合否を見てきてくれッ!」

智也「はあ？何でだよ？自分で見るよ」

陽一「極度の緊張により足が動きません…」

智也「お前どんだけビビってたよ

……バカなこと言っていないで行くぞ、明久手伝え」

明久「うん」

ガシツ！×2

ズリズリ…

陽一「ちよっ！？やめ、離せ！」

バカなことを言っているアホの襟首を掴んで無理矢理、合格発表が行われている掲示板に引きずっていく。

パッ

ドゴォ！

陽一「うげッ！！」

掲示板に着いたので今まで引きずっていた陽一^{バカ}を離す。

陽一「何すんだテメエ！！イテエじゃねエか！！」

智也「うるせエな。わざとだ。それにここまで運んでやったんだ、

感謝されこそすれ恨まれる筋合いはねエぞ」

となりでまだギャーギャー言ってるバカを放って俺は掲示板を覗く。

智也「さて俺の番号はっ…」

俺の番号は167番だ

智也「おっ あったあった」

掲示板には俺の番号が書かれてあった。

智也「やっぱり受かってたな」

俺が思っていた通り、見事に合格していた。

智也「…で？お前らはどうだったんだ？」

明久「と、智也！僕も受かってたよ！！」

智也「お、良かったな明久」

明久「智也が勉強教えてくれたおかげだよ」

智也「で、陽一は？」

陽一「…まだ見てない…」

智也「早くしろよ」

陽一「…怖いっす…」

智也「このゴドゴドめ…」

陽一「頼むよ？一生のお願いだッ！俺の変わりに見てくれ！！」

智也「……こんなので一生の願いなんてするなよ。

まあ土下座でもしたら見てやっても……」

俺は悪ふざけでそういつと

ガバッ

陽一「お願いします」

その場で土下座するアホ。

こいつにはプライドはないのか…

明久「……本当に土下座してるよ」

智也「本当にするなよ……わかった…見るから、土下座やめろ

俺たちがハズかしいから」

陽一「サンキュー…流石、俺の親友だ」

智也「そんな風に思ってるのお前だけだから」

明久「だね」

陽一「…ひどッ！！」

さて、コイツは受かってんのかね…

陽一の番号を探す…確か番号は159番だな。
番号を探す…

……

ポンッ

智也「…陽一」

陽一の肩に手を置き、神妙な顔で俺は告げる。

陽一「ど、どうだった…?」

明久「智也、どうだったの?」

智也「……あのな…非常に言いづらいんだが……お前は……」

陽一「…な、なに…?」

明久「え?」

智也「…残念ながら……

………受かってたぞ………」

陽一「…そっかぁ…ダメだったか…まあ仕方がないよな……

これも運命………って受かってんのかよ！……！」

智也「おおー見事なノリツッコミだな。さすが陽一^{バカ}だ」

陽一「なんでそんな紛らわしいことすんだよツ……！」

てゆうか『残念ながら』っなんだ……！」

智也「そんなの決まってるだろ。面白いからしかないだろ！
それに残念なのは俺だ。またお前と一緒になんだから」

陽一「お前最低だな……！」

智也「まあ落ち着け。良かったじゃねエか無事合格出来て」

陽一「ぐッ…まあね…そっか合格したんだ俺……良かった

………良かったよ！智也くん……！」

明久「良かったね陽一」

バツ！

急にバカが俺に抱き付こうとしたので俺は……

ドゴォ……！！……！」

陽一「ぶバァ……！！……！」

渾身の回し蹴りを放ってやった。

陽「イテエじゃねーか！」

智也「気持ちわりイ事してんじゃねエよ……アホが」

男に抱き付かれる趣味はねエ。

さて、そろそろ退散するか。

何やら今の一件で目立ってしまったようだ。

俺が騒いでいるバカを置いて帰ろうとすると、
後ろから突然声を掛けられた。

唯「あの、すみません！け、結果発表、一緒に見てくれませんか！
？」

振り返ると、若干癩毛気味の少女がいた。

智也「……はあ？何で？」

唯「じ、実は……一緒に来てくれるはずの友達が風邪で
来れなくなって妹も用事で来れなくなっちゃったんです……。

少女は暗い顔でそういう。

智也「そうか……分かった。

一緒に見てやるからそんな顔すんなって」

さすがにそんな顔されたら断りにくいしな。

唯「ほ、ほんとですか!？」

智也「ああ。ほんとだ」

陽一「ねえ僕の時と対応違わない？」

智也「気のせいだ」

明久「気にせいだよ」

陽一「いや、気のせいじゃ うべっ」

俺は陽一を黙らせて(腹を殴り気絶させて)

智也「じゃあ、ちよつと一緒に見てくるから

明久この陽一バカのこと頼むわ」

明久「わかった。じゃあ陽一連れて先に帰るね」

智也「悪いな。じゃあまたな」

明久「うん、じゃあね」

俺はそういうと癖毛気味の少女のところへ向かう。

陽一は明久に頼みつけて帰ってもらったことした。

居ても皆さんの邪魔にしかないからな。

.....

智也「ほら、せーのを見るからな」

唯&智也「「せーの!」「」

自分の番号でもないのに一瞬、ドキツとする。

唯「あ、あつた! やつた! ! ! ! !」

あ、そつだ。自己紹介遅れました!

私、平沢唯です。唯って呼んでください!」

智也「俺は中川智也だ。よろしくな平沢」

さすがに初対面の人間を名前で呼ぶのはな.....

唯「トモ君だね! ! !」

アレエ? いきなり下の名前で? しかももうあだ名かよ。
ちよつとハズかしいんだけど.....

そこへ1人の女の子が駆け寄ってくるのが見えた。

憂「お姉ちゃん！」

唯「あ、憂だ〜！」

智也「…………妹さんか？」

憂「用事早く済んだんだ。お姉ちゃん、この人は？」

唯「あ、紹介するね。掲示板一緒に見てくれたトモ君だよ！」

憂「お姉ちゃんがお世話になりました。トモさん」

智也「いや、別に俺は何もしていないよ。

それと俺の名前は中川智也っていうんだ。よろしく」

憂「あ、失礼しました。智也さん。よろしくお願いします。

お姉ちゃん、あだ名付けるのが好きなんです！」

そうなのか？

ハズかしいからやめてほしいんだが

唯「トモ君、メアド交換しようよ！」

智也「トモ君はやめろ。ハズかしいから。まあメアド交換はかまわないが」

唯「ええ〜。可愛いのに」

可愛いってあまりうれしくないな…………。

憂「私もいいですか？」

メアド送信&受信完了。

憂「あの〜、よろしければ智也さんも一緒に夕飯どうですか？

といっても、レストランなんですけど……。」

唯「とってもおいしいんだよ！一押しなんだよ！」

う〜ん、どうするかな。

でも、何かアレだな。

さすがにそれは気まずいな……。

智也「……遠慮しとくよ。家族でごゆっくり……。」

唯「えええ〜！！！」

俺が断ろうとすると平沢姉が声をあげる。

憂「お姉ちゃん、無理言ったらだめよ」

妹は必死に姉を宥めている。余計、断り辛い……。

智也「わ、わかった。目線痛いから、そんな顔するな！」

憂「え？良いんですか？智也さんはご家族とは予定ないんですか？」

智也「ああ両親は海外で仕事してて俺、1人暮らしなんだ。」

だから別にかまわないんだが良いのか俺なんかがお邪魔して」

さすがに今さつき知り合った人間がいきなりご家族と食事なんて少し気まずいからな。

憂「それは大丈夫ですよ」

↳平沢家一押しのレストラン↳

平沢・父「智也君も大変だね」

智也「い、いえ・・・でももう慣れてましたから」

憂「あ、お姉ちゃん！口にソースが・・・。」

唯「え、どこどこ？」

憂「動かないでお姉ちゃん！」

唯「ありがと、憂」

本当にできた妹さんだな。

結局、俺は平沢姉妹と一緒に食事に行く事になり、ご馳走にまでな
った。

キャラ紹介(1)

なかがわともや
中川智也

性別：男

誕生日：9月10日(乙女座)

身長：182cm

得意教科：英語・数学

苦手教科：古典

趣味：読書・ゲーム・バスケット・音楽鑑賞・演奏

ギターやベース

特技：料理(明久にはかなわない)・ギターとベース・バスケット
外見：見た目はクラナドの岡崎朋也で、髪の色・目の色は黒、

左眉に切傷痕があるので見た目はヤンキー。

性格：中身は家庭的で、女心にも疎い朴念仁。だが、変な所で鋭い。

また、温厚で面倒見も良く陽気な性格であり友達思い。
そして負けず嫌い。

- ・運動神経がよく、中学時代はバスケット部の部長だった。
- ・運動神経が良かったため雄二並の武力を持つ。
- また、成績も優秀で中学時代では常に上位をキープしていた。
よって文武両道。
- ・明久と陽一とは幼稚園からの付き合い。
- ・食べる事が好きで鞆の中にお菓子を常備している。
- だが、味覚はお子様で酸っぱい物やワサビが苦手。
- 寿司屋ではサビ抜きでいつも頼んでいる。
- ・両親は海外にて仕事をしているので1人暮らし中。

使用楽器

ギター：ホライゾン

春原陽一すのはらひょういち

性別：男

誕生日：2月17日（水瓶座）

身長：167cm

得意教科：保健体育

苦手教科：保健体育以外の全て

趣味：読書・ゲーム・サッカー

特技：サッカー

外見：クラナドの春原陽平

性格：陽気な性格であり友達思いで、家族思い。

・サッカー部の先輩が、同級生をいじめている現場を発見し、それを助けるが、暴力を使ったため退部した。

このため運動神経だけは優れている。

・不良として悪名が立っているが事を荒立てることを嫌うので、周囲からは「ヘタレ」のレッテルを貼られ、

不用意な言動が原因で他者から痛い目に遭わされたり、いらぬ誤解をされることが多い。

しかし心身とも丈夫で立ち直りは早い。

・智也と明久とは幼稚園からの付き合い。

・元々黒の頭髪を染髪して金髪にしている。

鉄人によく注意されているが本人は直す気は無い。

・妹の芽衣に対しては普段邪険に扱っているが、大切に思っている。家族思い。

・異性に対する興味が旺盛で、魅力的な女子を見つけてはすぐナンパしたがる。

しかし成功した試しは今だなし。

・勉強は苦手だが、関心事に対する集中力には目を見張るところがある。

キャラ紹介(1) (後書き)

皆さんの感想お待ちしております。

入学式の朝

桜の季節の4月某日。

智也「…よしっ」

俺は鏡の前で自分の姿を確認する。
中学の制服の学ランとは違い、ブレザーを着た俺がそこに映っていた。

まだ着慣れない高校の制服だが、まあ其の内慣れるだろう。

智也「…しかし相変わらずの面だな…」

俺は顔にコンプレックスを抱えている。

顔というよりは『目』だな。俺は『ツリ目』なのだ。

さらに小学校のときに怪我をして左眉のところに傷が少しある。
なのでヤンキーと間違えられていたりする。

最初の頃は髪を伸ばして傷を隠していたが
鬱陶しいのもあり、今では何もしていないが……

智也「そうだ。明久に電話してみるか。」

なんとなくまだアイツ寝てそうだし」

俺は明久のことが気になり電話をかけてみる。

プルルルルル

ガチャ

明久「はい、もひもひ、吉井ですけど……」

智也「おはよう明久。今起きたみたいだな」

明久「ん？あれ？智也どうしたの？」

智也「いや、お前の事だから寝坊するんじゃないかと思ってな」

明久「え？つて、ええ！？もうこんな時間なの！？」

智也「ありがとう！電話もらってなきゃ寝坊するところだったよ」

智也「じゃあ、起きた事だし入学式の時ぐらいは遅刻するなよ。」

……あとおそらくないと思うが間違っても姉の制服着てくるなよ」

明久「そんな間違えるわけ……ナイジャナイカ」

智也「おい、今の間は何だ？しかも最後なんで棒読みなんだ？」

明久「えっと昨日準備していた制服が姉さんの制服だった……」

智也「さっそくじゃないか！？」

「一応言っておくが俺達の制服はブレザーだからな」

明久「う、うん。ちゃんと確認してから着るよ」

智也「じゃあ、また学園でな。遅刻するなよ」

明久「うん。じゃあ、また学園で」

俺は電話をきる。

智也「さてっと、俺もそろそろ行くか。」

今日は高校の入学式だ

途中でコンビニに寄り、カフェオレとパンを買い、店を出ると…

タッタッタッタ

智也「ん？」

足音か…？ 音がする方に視線を向けると…

智也「平沢？」

視線の先には平沢がこちらに向かって走ってきていた。そして俺に気付く事もなく通り過ぎて行った。

智也「どうしたんだあいつ？あんなに急いで」

時計でも見間違えて、遅刻だと思ったのか？まさかな。

……明久や陽一みたいなヤツはそうそういないよな。

学校に近づくにつれ、段々と学生の数が増えていく。歩いてみると校門に着いた。

そして同時に見知った人物も見つけた。

その見知った人物『平沢』は、ぼーっと突っ立って校舎を眺めていた。

周りの上級生や新入生はそんな彼女を一瞥し、過ぎ去って行く。

あんな場所（校門のど真ん中）に立っていられたら皆の邪魔になるので声を掛ける事にした。

智也「おはよう平沢」

唯「ん？ あっ！トモ君！！おはよう！！」

声掛けるとこちらを向き、途端笑顔になる平沢。

智也「校舎見上げて何してたんだ？」

唯「いやあ？ 恥ずかしいんだけど時計、見間違えちゃって……」

智也「ん？ どういう事だ？」

ま、まさか……

唯「朝起きて時計見たときね、『遅刻だあ！』って
思っただけで学校に向かったんだ」

智也「……」

唯「んで 学校に着いて時間確認したら、

『あれっ！？時間見間違えたあ！？』って思っ

ぽーっとしてたんだあ。いやっ〜お恥ずかしい」

そう言っ

て頭をかく平沢。
(マジか…まさかあの2人と同じようなヤツがいるとは)

唯「どうしたの？トモ君？」

俺が黙ったままだったので、顔を覗き込んでそう尋ねる平沢。

智也「気にするな。ちょっと考え事をしてたんだ」

唯「そうなんだあ」

智也「クラス分け、もう発表されてるんだろ？さっさと見に行こうぜ」

唯「うん！ そうだね」

俺は平沢と一緒にクラス分けを見に行こうとすると

????「唯？」

と誰かが平沢を呼ぶ声がした。

唯「あっ！和ちゃん」

『和ちゃん』と呼ばれた平沢よりも短い髪に眼鏡をかけた女子が俺達に向かって歩いて来た。

智也「知り合いか？」

唯「うん！そうだよ！友達なんだ」

和「珍しいわね。唯が私より先に学校に来るなんて」

唯「いやゝはははは…ま、まあねえゝ」

『時計を見間違えて早く来た』とは言えないよな。平沢は冷や汗をかきながら曖昧に返事をしている。

和「ねえ 唯、この人は？」

『和ちゃん』と言われる女性が俺の方を向き平沢に尋ねてきた。そりゃ当然の疑問だよな。

友達の横に見知らぬ人物が居ればそういう質問になるよな。しかも俺の見た目はヤンキーみたいだからな。

俺が自己紹介しようとする

和「もしかして、あなたがトモ君？」

智也「えっ!？」

何で俺の事知ってたんだ!?!まさかエスパーか!?!しかもトモ君呼ばわり!?!やめて!恥ずかしいから!!

唯「うん！そうだよ、この人がトモ君だよ」

智也「ええっと和さんだっけ？なんで俺の事知ってるんだ？

それとトモ君はやめてくれ。かなり恥ずかしいから」

唯「ああゴメンなさい。唯から聞いてね。

『新しい友達が出来たんだ』って」

智也（なるほどな、平沢から伝わったわけか。）

そう思い、平沢に視線を向けると…

唯「えへへ」

と嬉しそうな笑顔を浮かべていた。

そんな顔されるとこちらが照れるじゃないか

和「じゃあ自己紹介するわね。真鍋 和です 唯とは幼馴染みなの」

唯「私達ずっと一緒なんだよ」

幼馴染みか、俺と明久、陽一みたいなもんか。

……いや あの陽一バカと一緒にされたら可哀相だな。

智也「俺の事は平沢から聞いてると思うが…

中川智也だ。これからよろしくな」

和「ええ、こちらこそよろしくね」

入学式の朝（後書き）

和ちゃん登場です！

皆さんの感想お待ちしています

入学式の朝　〜バカ登場〜

俺達が互いに自己紹介を終えようとしたとき

陽一「そして俺が智也の親友の春原陽一！ヨロシク！」

朝からテンションの高いバカが出現した。

唯・和「わっ！！」

急に出てきたバカに驚く平沢と真鍋。

コイツは必要な時には出てこず、全く必要ない時に出て来るな……

智也「お前どっから湧いて出てきた？」

陽一「ヒドいな。人を虫みたいにいうなんて傷つくじゃないか」

智也「いや、お前は虫じゃないだろ」

陽一「当たり前だ」

智也「お前と虫が一緒なんて虫が可哀想だろうが」

陽一「え！？ナニソレ。虫の心配！？俺虫以下なの！？」

智也「なに当たり前なこと言ってるんだよ」

陽一「当たり前なのか！？アナタヒドイよ！！」

智也「デケエ声出すな、うるせエしウザいキモイし」

陽一「そうさせたのアナタでしょうが!!」

楽しいか!?こんなこととして楽しいのか!?

ってキモいつてなんだよ!!」

智也「非常に楽しい。お前をからかうことが俺の生きがいだ」

陽一「最悪だア!!!!コイツ!!!!」

そう言つて頭を抱える虫以下の生物。

……ああ楽しいなあ。

さてコイツをからかうのはこれくらいにするか、合格発表のとき同様、周囲からの視線が痛いし……

それに……

唯・和「」……」

平沢と真鍋がポカンと口を開けていた。

和「……えーっとその人は?」

と真鍋から質問が来た。

智也「コイツは一応俺の……友達なのかな?いや、悪友か?」

陽一「一応ってなんだよ。しかも何故、疑問系だ…しかも悪友ってなんだよ」

未だに頭を抱えている陽一が先ほどとは真逆のテンションで
呟くように俺に言ってきた。

智也「そっちのほうか面白いからな」

陽一「アナタ、本当に最低ですよね」

智也（大丈夫。こんなことするのはお前だけだから）

あえて口にはしないが……

明久「智也！陽一！おはよう！」

そこで明久も合流した。

智也「おはよう俺の親友の明久」

陽一「って明久は親友で僕は悪友なのかよ」

智也「当たり前だろ」

陽一「コイツ本当に最低だ!!」

明久「ねえ智也？この人たちは？」

智也「ああ1人は明久も見たことあると思うが、

合格発表の日、一緒に見た見た平沢で、こちらは平沢の幼馴染の

真鍋だ」

明久「あ、初めまして吉井明久です。よろしくね」

唯「あつ私は平沢唯だよ」

和「真鍋和です」

明久とついでに陽一に自己紹介をする2人。
すると頭を抱えていた修司は立ち上がり。

陽一「春原陽一です！智也とは親友やってます！」

満面の笑みで本日二度目の自己紹介という快拳を成し遂げた。

唯「うん！よろしくね明久君、陽一君！」

和「よろしく」

陽一「ヨロシク！唯ちゃん、和ちゃん」

明久「よろしくね平沢さん、真鍋さん」

さっきはあんなにへこんでたというのにすぐさま元のテンションに戻る。

……切り替え早エな

しかも陽一はいきなり名前で呼んでるし……

唯「明久君と陽一君は、トモ君とはいつからの付き合いなの？」

陽一「あぶらッ！！！」

陽一の腹に蹴りをいれる。

3メートル近く吹っ飛びピクリとも動かなくなる陽一。

唯「えっ！？」

絶叫する平沢と

和「やり過ぎなんじゃないの？」

あくまで冷静な真鍋。

明久「だから言ったのに」

智也「大丈夫だろアイツなら。

……ほらいい加減クラス分け見に行こうぜ」

和「そうね……行くわよ、唯」

吹っ飛んだ陽一の方を眺めている平沢に声をかける真鍋。

『そうね』ってなかなかいい性格してるな、真鍋は…

唯「えっ！？陽一君はどうするの！？」

智也「1人になりたいんだって」

唯「う、うん…そうなんだ」

陽一をそのまま放置し、俺達はようやく、学校内へと歩き出した。

クラス分けの結果は

平沢と真鍋とも同じクラスになった。

……ついでに陽一のヤツとも同じだが……。
明久とは別のクラスになってしまった。

1 - A

春原陽一・中川智也・平沢唯・真鍋和

1 - C

秋山澪・木下優子・霧島翔子・琴吹紬・田井中律・姫路瑞希

1 - D

木下秀吉・坂本雄二・島田美波・土屋康太・吉井明久

という風になった。(あいうえお順にて記載)

初日は簡単な自己紹介で終わった。

入学式の朝　　～バカ登場～（後書き）

最後にバカテスマンバーとけいおん！のメンバーの1年次のクラス分けをしてみました。愛子は転校してくるのでいません。

皆さんの感想お待ちしています

雄二たちとの出会い(1)

〔1-Aの教室・放課後〕

入学して2週間が過ぎた。部活はまだ検討中……。

そんな事を考えていると真鍋たちの話し声が聞こえた。

和「唯、まだ部活に入ってないの？」

唯「何かしなくちゃいけないとは思ってるんだけど……。」

和「はぁ……こうやって二トが出来上がっていくのね……。」

智也「……さすがにオーバーじゃないか？」

「ってかもしそうなら俺も二トの一員ではないのか？」

唯「トモ君は部活決めたの？」

智也「俺もまだ決めてない」

和「……アナタもなの？」

何その視線は……そんな目で俺を見ないでくれ

智也「でもまあバスケット部にも入ろうかなとは思ってるがな」

和「バスケ部に？」

智也「そう。だけどここってそこまでバスケ強くないから迷ってるんだよ」

和「確かにここのバスケ部が強いなんて聞かないわね」

智也「だろ。だからまだ検討中なんだ」

俺は話をきりあげると帰り支度を済ませる。

陽一のバカはどこかに行ってるから明久と帰るかな。

↓ 1 - Dの教室・放課後 ↓

雄二「やれやれ…… やってもいないことに文句ばかり抜かしやがって」

雄二は中学の頃は悪鬼羅刹と呼ばれていて少し性格が悪い。

雄二は廊下を独りぐちる。

そして1人で帰り支度をすませていると、

雄二「つと、と……」

誰かの机にぶつかり中に入っていた教科書が落ちてしまった。

雄二「この時期からもうこのザマとは勉強熱心なヤツだな」

とりあえず雄二は落としてしまった教科書を拾おうと手を伸ばす。そしてその惨状に気がついた。

雄二「……これは酷いものだな……………」

そこには表紙は破れ、ページはぐちゃぐちゃになっていた。新品で受け取ったばかりなので普通に使用していればまずはこのようにならない。

雄二はその教科書を拾い裏表紙を見ると

そこには『島田美波』と名前が書かれているのがわかった。

彼女はドイツからの帰国子女でまだ日本語が上手く言えないみたいだった。

雄二「そういえばあいつ、初日にクラスの連中を『ブタ』呼ばわりしてたっけ」

おそらく本人は意味をよく理解せずに言ったのだろうが、それに腹立てた連中がやったんだろうな……

雄二「……………まあいいか。俺には関係のない事だ」

雄二はそれをしばらく観察してから、机の中に戻そうとする。

その時だった

雄二「っ!?!?」

目の端に高速で動く何かが映った。
頭が判断する前に体が勝手に反応し、その場から大きく飛びのく。
間一髪で回避が間に合い、目の前の誰かの拳が通過する。
この時点でようやく、誰かが俺に殴りかかってきた、ということ
を理解した。

雄二は体勢を立て直し、拳の主を見る。

そこには

明久「……………」

雄二とは入学初日から因縁のある人物だった。

雄二「どういっつもりだ、テメエ」

雄二は静かに明久に問いかける。

2人は互いを快く思っていなかった。

雄二は明久のバカさ加減が気に入らず、

明久は入学式の時、雄二がある女性に話しかけられても無視し続けたので、

理由を聞こうとして、入学式初日から騒ぎを起こしたりしている。

明久「……………なに……………やってんだよ……………」

雄二「それを聞きたいのはこっちのほう」

明久「オマエ、その子の席で何やってるんだって聞いているんだよ！」

いつものマヌケな姿からは想像つかないような怒鳴り声をあげる明久。

その視線は雄二の右手へと向いていた。
.....正しくは雄二の持つてるボロボロの教科書へと。

雄二の脳内では今の状況を整理していた。

雄二の右手のボロボロの教科書・無人の教室
校内に流れる雄二の風評・吉井の先ほどの台詞

それらから思い浮かぶ1つの結論。

雄二「.....ま、まさか.....おい待て吉井。俺は」

明久「歯を食いしばりやがれこのクズ野郎っ！」

雄二「チツ、このバカ野郎が.....!
落ち着け!これは俺がやったわけじゃねえ!」

明久「ブチ殺す！」

雄二「人の話を聞きやがれ！」

明久は完全に雄二の話を聞いてない。

雄二「なら、ちよっくら相手してやらあ！」

と、雄二の言葉をかわきりに殴り合いが始まる。

明久「.....絶対に.....ぶっ飛ばす.....！」

雄二「しっつけえな!まだやんのかよ!」

雄二は明久と殴りあいながら明久の事を考えていた。

雄二（なんでコイツは、諦めないんだ……？）

俺とコイツじゃ、どっちが強いなんて一目瞭然だろ）

雄二の思っている通り、雄二に比べ明久のほうが傷が多かった。

雄二「いい加減にしろ、クソバカ野郎が！」

雄二は明久と戦いながら小学校の頃の苦い思い出が蘇る。

明久「……可哀想……じゃんかよ……」

雄二「あア!？」

雄二は一瞬何を言ってるのかわからず聞き返す。

明久「可哀想だと思わないのかよ!あの子は日本に来て

知り合いがいなくて、言葉がわからないのに、

それでも1人で頑張っているんだぞ!

どうしてそんな頑張っている子を虐めるんだよ!」

ボロボロのはずの明久は、力の籠もった声でそう言った。

雄二はそんな明久を見て前にも同じような状況を見ていた気がした。

いや、違うか。俺はコイツと違って逃げようと考えた。

雄二は我が身が大事だった。

だが、明久は

明久「オマエみたいなヤツ許せるもんか！」

ガツン！ と一際大きな音が響いた。

明久は先ほどと比較にならないほどの勢いで吹き飛んだ。

そして雄二も明久の攻撃を食らい視界が揺らぐ

雄二「吉井！そんなに俺が気に入らないのならかかってきやがれ！

2度と立てないくらい殴ってやらあ！」

明久「言われるまでもない！オマエをぶっ飛ばして後悔させてやる！」

雄二「ごちゃごちゃうるせえんだよ！この雑魚が！」

そしてお互いの拳が届く距離まで駆け寄ったところで

智也「そこまでだ！」 康太「………そこまで」

明久・雄二「っ！？」

突如2人の前に人影が入ってきた。

雄二の前には智也が拳を受け止め、康太は明久の目の前にペン先を向けていた。

雄二「邪魔するな！テメエらには関係ないだろうが！」

康太「………それ以上暴れてもらっては困る」

智也「そうだ。コイツの言つとおりだ」

康太「……………カメラが壊れる」

3人「………はあ？」

康太の意味の分からない言葉に

雄二と明久だけではなく智也まで疑問符をあげる。

智也はてつきり2人の喧嘩を止める為に手伝ってくれたものかと思つていたので。

康太はそういうと教室のスミに行きゴソゴソと何かを取り出した。

……………あれはCCDカメラか？でもなんであんな所に？

智也「……………まさか盗撮か？」

康太「……………！！（ブンブンブン）」

康太はすごい勢いで否定している。

雄二「……………けっ。なんだか気が削がれちまった。命拾いしたな吉井」

雄二はそう言つと鞆を肩に担ぎ明久に背を向ける。

明久「待てよこの野郎！」

雄二「ぐがっ！」

明久は帰ろうとする雄二の肩を掴んで殴りつける。

智也「おい！明久落ち着けよ」

雄二「……………まだ続けたいようだな吉井」

再び一食触発の雰囲気にかわる。

智也「おい、お前らいい加減に」

俺が2人をとめようとする

???「キサマら、何をやっとするかっ！」

3人「っっっ！」

突如野太い声に阻まれた。

秀吉「どうじゃ？頭は冷えたかの？」

そこには女顔で爺言葉を使う同級生。木下秀吉がいた。

智也「今の声もしかしてオマエか？」

秀吉「どうじゃ？似ておったかの？」

一時は秀吉に気をとられていると明久が雄二に殴りかかろうとしていた。

明久「離れて木下さんっ！くたばれ、この」

雄二「けっ、ホントにしつこい野郎だ」

智也「お互いいい加減にしとけよ」

ダン！！

俺は2人に前に出て2人の手を掴み床へと叩きつけた。

智也「さっきから言ってるよな。やめろって。ってかなんだこの状況は。」

「ここが騒がしいから覗いてみたら2人が殴り合ってるし」

明久「智也止めないで！僕はこの外道をブチのめさないといけないから」

雄二「けっ、できるもんならやってみやがれ」

智也「なんだ2人とも、まだやる気なのか？」

「それなら俺も本気でやらせてもらうが？」

秀吉「まったく……。理由は知らんが、

教室でコレ以上暴れられるのはワシもクラスメイトとして見逃せん。」

「事情を聞かせて貰えんじやろうか」

明久・雄二「フンっ！」

智也「すまないな……。えっと……」

秀吉「ワシは木下秀吉じゃ」

康太「……………土屋康太」

智也「ああ、木下と土屋か。俺は中川智也だ。

こいつ等を止めるのを手伝ってくれてありがとう」

秀吉「よいのじゃ。クラスメイトじゃからのう」

康太「……………自分のためだ」

智也「で、何が原因なんだ？」

だが、2人は何も喋ろうとしなかった。

秀吉「やれやれ参ったのう」

智也「これじゃあサツパリわからないぞ」

康太「……………(スツ)」

智也「ん？何だこれは」

康太「……………見るといい」

そんな中、康太はカメラをいじり動画を見せてくれた。

秀吉「……………脚しか映っておらぬが？」

智也「……………土屋。やっぱり盗撮を」

康太「……………（ブンブンブン）」

物凄い勢いで否定する康太。

2人も不満気であるが動画を見ることにした。

雄二たちとの出会い(2)

その後、動画を見ていくと放課後教室の掃除をしている時に島田の教科書が落ちてしまい、掃除している人たちは話に夢中で気づいていなく、気づいた頃にはすでにボロボロの状況だった。

康太「……………これが真相」

康太が画面を操作して画面を消すと、

明久「ごごごごごごご、ごめんなさいっ！」

明久が突然雄二に深々と頭を下げ謝りだした。

雄二「なんだ、いきなり」

明久「その、もう、なんてお詫びしていいか……………！
とにかく坂本君気がすむまで僕を殴って」

雄二「いや。もうお前を殴る場所ねえし」

明久「あ、そっか。えっと、それなら」

智也「どうしたんだ明久。突然？」

明久「あ、うん。実は」

つまり明久は雄二が島田の教科書をボロボロししたと勘違いして

この惨状が出来上がったわけだ。

秀吉「しかし、坂本も坂本じゃな。きちんと説明したら良かったものを。」

あの様子じゃと説明しておらぬようじゃのう」

雄二「……………ふん！」

秀吉「何か事情があったのかのう？」

雄二「お前には言ってもわからねえよ木下。

んじゃ、用事が済んだから俺は帰るぞ」

明久「あ、うん。また明日、坂本君。それと、本当にゴメン」

雄二「けっ」

雄二は明久に背を向け再び鞆を肩に担ぐ。

明久「ねえ智也、木下さん。新品の教科書って

どこに行けばもらえるか知ってる？」

智也「新品の教科書か……………」

秀吉「うん？いや、ワシは全然知らんが」

智也「明久。言っておくが秀吉は男だぞ」

明久「え？」

智也「いや、普通わかるだろ？」

秀吉「中川おぬしはワシが男じゃとわかるのか？」

智也「はあ？当たり前だろ」

秀吉「よ、良かったのじゃ。」

皆、ワシのこと女子じゃと勘違いしておってるのう」

智也「大変なんだな木下も。それより教科書だ。土屋はわかるか？」

康太「……………（フルフル）」

明久「そっか」。購買には売ってないかな？」

智也「購買には売ってないかもな。」

もしあったとしてもこの時間だともう閉まってるぞ」

明久「ならコピーして」

秀吉「何枚コピーするつもりじゃ……………」

康太「……………そもそもきちんとした教科書にならない」

明久「じゃあ、アイロンをかけるとか」

智也「服じゃないんだから無理だろ」

明久「僕の教科書と入れ替えるとか」

秀吉「配布された日に全員名前を書いたじゃろうが。

お主の名前が残っておっては入れ変えられんぞ」

康太「……………根本的に解決していない」

明久「連帯責任で皆の教科書もボロボロにする」

秀吉「確かに島田の教科書は目立たなくなるかもしれんが……………」

智也「迷惑だろ」

明久「じゃあじゃあ」

雄二「あーもうっ！頭悪いなテメエラは！

んなもん教師に説明すればいいだろうが」

明久「あ、そつか。悪い事してるわけじゃないもんね」

秀吉「そういえばそうじゃな。坂本よ。よく教えてくれたのう」

康太「……………盲点だった」

智也「さすが坂本。優しいな（ニヤニヤ）」

雄二（コイツ最初から気づいてやがったな）

明久「あ、坂本君ありがとう。助かったよ」

雄二「……………」

坂本が教室から出ようと扉に手をかけると

西村「待て、坂本。ここで何をしている」

皆「……っ！？」「……」

明久「筋肉教師……」

西村「西村先生と呼ぶ」

やばいな。今の状況は。

今の教室の状況に明久と雄二の傷跡がある。言い逃れはできない。

明久「先生すみませんっ」

西村「むおっ！？」

そこで明久が上着を脱いで筋肉教師の顔にかぶせる

康太「………失礼」

さらに康太がどこから取り出したテーブルを上着の上から巻きつけ簡単に取れないようにする。

秀吉「今のうちにこっちからにげるのじゃー！」

木下が窓を開けそういう。

が、それは嘘だ。明久たちは扉から脱出し、身を隠す。

俺は囮役をかい、窓から地上に着地し、逃げる。

西村「待て、貴様ら！逃がさんぞ」

筋肉教師はまんまと策にひっかかり俺を追いかける。

俺はそのまま筋肉教師から逃げつけたが、体力が持たずにつかまっていた。

その後、結局明久たちも捕まったが教科書はなんとかあったみたいだ。

あの後教師が誤って新品の教科書を廃品回収にだしてしまったので、それを明久と雄二が回収車を追いかけなんとか追いついて教科書を手に入れたみたいだ。

その件もあり明久と雄二は仲が良くなり、名前で呼び合うようになった。

もちろん、協力してくれた秀吉や康太。俺とも仲が良くなり名前で呼び合う仲になった。

雄二たちとの出会い(2) (後書き)

今回は雄二たちを登場させました。

長文になったため、2話構成で描いています。

皆さんの感想お待ちしております。

軽音部って何かな？

〽後日、Dクラス〽

午前の休憩時間

雄二「おい、明久Bクラスのやつらが購買のパンをかけて
バスケットやらないかって言ってるがどうする？」

明久「パン！やるやる。今月は食費がヤバかったんだだから助かる
よ」

雄二「ならメンバー集めるか」

康太「……………手伝う」

秀吉「ワシも参加させてもらおうかの。なにやら楽しそうじゃ」

明久「なら僕は智也に声掛けてくるよ」

雄二「ああ、今日の昼休みだからな」

〽Aクラス〽

俺は陽一と話をしていた。

智也「そういえば陽一は部活なにかするの？」

陽一「ん？あー俺は帰宅部だね。いい女探しに行くからな」

智也（あー。コイツらしい理由だな）

陽一「そういうお前は？」

智也「まだ考え中だ。まあそろそろ決めないとな」

陽一「まあ智也は頭もいいし、運動も出来るし、音楽も出来るからな。

でもバスケットでもするのか？」

智也「まあやるなら自分の好きなことしたいからな」

俺と陽一が話していると明久がやってきた。

明久「ねえ智也。今日の昼休み、Bクラスの人たちと

購買部のパンをかけてバスケットしない？」

智也「ああ、いいな。乗った。雄二たちもやるんだろ」

明久「うん。あ、陽一もどう？」

陽一「もちろん。僕もやるよ」

明久「じゃあ今日の昼休み体育館だよ」

俺達が会話をしていると今度は平沢が話に入ってきた。

唯「ねえトモ君、軽音部って何かな？」

智也・明久「「軽音部？」」

なんでいきなり軽音部なんだ？

唯「私ね、軽音部に入部したんだけど何するのかよく分かんないんだあ」

智也「何するのか分からないのに入部するなよ

…てか軽音部っていったら…ギター弾いたり、ベース弾いたりして、

バンドとか組んだりするところだろ」

陽一「へえ〜」

唯「えっ ギター…？ バンド…？」

そんな単語がでてくるとは思わなかったみたいな顔をする平沢。そして陽一お前も知らなかったのか？

唯「ええ！？ そうなの！？ 私、軽い音楽って書くからってきり

簡単なことしかとやらないと思ったのに…」

智也「簡単なことってなんだよ？」

唯「口笛とか…」

智也「なんだそのやる気のでない部活」

明久「そうだね」

唯「和ちゃんにも言われた…」

口笛をする部活ってなんだよ…かなりシユールだな。

和「じゃあ 何なら弾けるの？」

俺達の会話を聞いていた真鍋が平沢にそう聞いてきた。

唯「ん？……………カ、カスタネット…」

和「…すごく似合うわ…」

智也「……………同感」

陽「カスタネットが凄いな唯ちゃんは」

明久「陽……………」

なんか1人変な事言ってるがスルーするか

キーン コーン カーン コーン…

休憩時間の終了を告げるチャイムが鳴る。

唯「どうしよう和ちゃん？…」

和「どうしようって言われても…」

智也「大変だな真鍋も……」

平沢は真鍋に泣き付いていた…

明久「じゃあ昼休みに」

智也「おう」

昼休みのバスケットはもちろん俺達が勝っておごって貰った。

入部

放課後になり明久が俺を待ってる間に、帰りの支度をしていると…

唯「あの〜トモ君、アキ君」

智也「ん？」

明久「え？」

平沢に呼び止められた。

つてかもうつも君言われるのには慣れた。というかもうあきらめた。それに何故か明久もアキ君言われてるし

唯「あのね…お願いがあるんだけど…」

智也「……………どうしたんだ？」

明久「何かあったの？」

唯「えつとね……………軽音部の部室に一緒に行ってもらえないかな？」

今まで俯いていた顔を上げそんなことを言う平沢。

智也「なんで？」

…まあ理由は想像つくけど。

唯「それは、軽音部に辞めますって言いたいんだけど

… 1人じゃ心細いし、軽音部に怖い人がいたら恐いし…」

… やっぱりか…

智也「何で俺たちなんだ？別に悪くないが真鍋に頼めばいいじゃないのか？」

唯「…和ちゃん、生徒会があるからって断られちゃった…」

お願いだよ！？トモ君とアキ君しか頼れる人いないんだよ！

そう言っただけに泣きながら抱き付いてくる平沢。

智也「って、なんで抱きついて来るんだ！？ひとまず離れる」

唯「やだっ！一緒に行ってくれなきゃ離さないッ！」

早いとこ、この状況をなんとかしなければならぬ。
なぜなら、周囲からの視線が痛いからだ。

俺に泣きながら抱き付く平沢。

その平沢を引き剥がそうとする俺。

更に平沢が「見捨てないで」だの「1人はイヤだ」なんて言うもんだから…

女子A「中川君、平沢さんに何したの？」

女子B「平沢さんかわいそう…泣いてるよ…」

という、俺がまるで悪人の様な誤解をあたえてしまっている…
これ以上「離せ」「イヤだ」の押問答を続けるわけにもいかない。

それに女子に抱き疲れるなんて今までなかったから恥ずかしい。

智也「ってか誰も行かないなんて言っていないだろ。」

「良いよ。一緒に行つてやるよ。」

唯「本当に!？」

明久「優しいね智也は。平沢さん、僕も一緒に行くよ。」

先ほどまでの泣顔が嘘の様に途端に笑顔になる。

唯「ありがとう、トモ君!アキ君。」

俺は泣き止んだ平沢を連れて明久とともに
軽音部の部室である音楽室へと向かった。

〈音楽室前〉

階段を上つて、ようやく音楽室に着いた。

ん?平沢が震えてる?もしかして緊張してるのか

そこで後ろから声がかかる。

律「あなたが平沢唯さん?。」

唯「はあ〜びつくりしたあ〜。あ、はい。そうです。」

律「はあ〜〜 ムギ、お茶の準備だ！」

いやあ〜、入部希望者が3人も来てくれるなんて」

え・・・3人つてことは・・・俺と明久も入ってるのか？

智也「いや、俺は・・・」

明久「え？僕は・・・」

律「さあ、入った入った！！！！」

智也「お〜い・・・」

明久「え？え？」

〜音楽室〜

漣「軽音部へようこそ！！」

紬「お待ちしてました〜」

智也「はあ」

紬「さあ、召し上がって」

目の前には高級そうな紅茶とお菓子が置いてある。
凄い美味しそうなんだが……

唯「わあ〜凄くおいしそう

明久「本当だ美味しそう」

完全に本来の目的を忘れてるよこの人。しかも明久まで。しかも2人とも幸せそうな顔でケーキを頬張っているし…

智也「はあ…」

すると部長らしき人物が…

律「食べないの？」

と聞いてきた

紬「もしかして甘いもの苦手だったかしら…？」

といかにもお嬢様みたいな女子が申し訳なさそうな顔をしていた…そんな顔されたら食べないわけにもいかず…

智也「いや、ちょっと考え事してたんだ。

甘いものは好きだし。じゃあいただきます」

と一口ケーキを口の中に入れると。

智也「…うまっ」

思わず声が出てしまった。そこら辺のケーキ屋より遥かに美味しい。ケーキは結構食べてるほうだがこれはかなり美味しかった。

律「そうだろ？ムギの用意するケーキは美味いんだぜ！」

紬「いえ そんな……」

何故か威張る部長らしき女子と、謙遜する『ムギ』と呼ばれる女子。

漣「平沢さんと……えつと……」

黒髪の女子が俺の方を見て困った顔をしていた。

智也「ああ、俺の名前は中川だ」

明久「僕は吉井だよ」

漣「あつ……うんっ」

俺の名前が分からなかったんだろっから教えると、黒髪の女子はどこかホツとしたような顔をした。

漣「平沢さんと中川君に吉井君はどんな音楽やりたいの？」

改めて黒髪女子が聞いてきた。

唯「えっ!?!?」

吉井「あっ」

智也「あ……」

平沢は今まで食べていたケーキから目を離し驚いた声を出した。
明久も今頃目的を思い出したみたいだ。

智也「とても言いにくいんだが。俺達は入部しにきたわけじゃないからな。」

それにコイツも実はギター弾けないから退部しにきたんだ」

律「えええ!!! そうなのか!？」

待つて、あと1人入部しないと廃部になっちゃうんだよ!!!」

智也「マジで!？」

俺、そんなこと聞いてないぞ。

律「うん、マジで!！」

明久「どうしよう智也」

智也「そういつてもな……」

律「そんなこと言わずにせめて演奏だけでも聴いてってよ!」

智也「平沢いいか?」

唯「うん!」

智也「じゃあ。聴かせてもらってもいいか?」

律「もちろん!」

そして俺と明久、平沢は演奏を聴いてみた。

翼をくださいのロックverか。

にしても、なんだろうこの感覚は・・・新鮮だな。

演奏自体は正直言つとあまりうまくないけど心に響く演奏だったな。

唯「あんまり、うまくないですね！」

平沢が思ったことをそのまま口にした。

律「ばつさりだー！」

明久「言っちゃったよ」

唯「でも、私、この部に入部します！軽音部に！」

智也「良いのか？」

唯「皆さんなんだかすつごく楽しそうでした！」

だから私この部に入部します！！」

律・澪・紬「「「やったー」」」

智也「まあそれでいいなら俺はいいが…」

じゃあ俺は帰るとするか。もう用事は済んだし。

ケーキご馳走様でした」

明久「じゃあ僕も」

俺と明久は席を立ち帰ろうとすると

唯「え？トモ君もアキ君も一緒に軽音部入ろうよ。

確かまだ部活入っていないんだよね」

智也「まあ、まだ部活は決めてないが……」

明久「うん、僕もだけど……」

そこで部長らしき女子の目がキラリと光る。

律「なら、軽音部に入ろうぜ」

智也「え？い、いや。俺は……」

明久「え？」

唯「そうだよ〜トモ君もアキ君も一緒に入ろうよ〜」

律「そうだ！そうだ！一緒にやろうよ！！」

今なら『副部長』のポジションが空いてるから！」

そんなポジションは正直いらない

智也「……なんで俺たちを誘うんだ？

平沢が入部したんだから廃部することは
なくなっただけだからいいんじゃないのか？」

その疑問をぶつけると……

律「理由は簡単だ！人数増えた方が、演奏の幅が広がるからな！

…あと部費も増えるし…」

おい、今本音が聞こえたぞ

唯「私はトモ君とアキ君と一緒にやりたいな！」

律「漣とムギも入って欲しいよな??」

黒髪女子とムギに聞く部長らしき女子。

紬「ええっ もちろん!!」

漣「元々、入部希望者だと思ってたしな断る理由はないよ」

あれ? 歓迎ムード?

律「ほらほら2人もこう言ってるんだからさ」

唯「そうだよトモ君! アキ君!」

智也「……」

明久「……」

そうだな。このまま何もせずグダグダするより、1度入ってみるか。
気に入らなかつたらやめればいいだけだしな。

……それにケーキおいしかったしな。

智也「わかった。入部するよ」

明久「僕も入るよ」

律「本当か!？」

智也「ああ、本当だ」

明久「うん、本当だよ」

律・唯「やったーっ!」

透「これで本当に6人目獲得だな!」

紬「はいっ!」

智也「……」

明久「……なんか照れるね／＼」

俺たちが入部するだけで、こんなに喜ぶ彼女達。なんつうか…悪い気はしないな…照れくさいけど。

律「そういえば…えっと…名前なんだっけ?」

智也「ああ、ちゃんとした自己紹介はまだだったな。

俺は中川智也だ。これからよろしく頼む」

明久「僕は吉井明久だよ。よろしくね」

律「智也と明久か。じゃあトモとアキだな。

トモとアキは何か楽器できるのか?」

智也「俺はギターかベースなら出来るぞ」

明久「僕はキーボードなら」

律「マジで！凄いの入ってきたよ！」

唯「すごい、2人とも！弾けるんだ！」

智也「親が昔バンド組んでいてな。一通り教えてもらったんだ」

明久「僕は母親に教えてもらったことがあるんだ」

澪「それでも凄いな」

唯「あ…でも私、全然楽器出来ないし…」

あつ！マネージャーとかどうかな！？」

智也「いや…運動部じゃないんだし…マネージャーは……」

紬「そうだ！」

俺達なの会話から何やら思い付いたらしい『ムギ』が、
こんな提案を俺と平沢にしてきた。

紬「中川君ってギターできるのよね？」

智也「まあ、ある程度は」

紬「なら、中川君が平沢さんにギターを

教えてあげたらよろしいのではないのでしょうか？」

律「それはいい案だなムギ」

智也「え？俺が？いや、無理だろ」

律「大丈夫さ。自分を信じろ。ってか部長命令」

智也「理不尽な」

明久「智也ならできるよ」

唯「よろしくお願いします師匠！」

智也「はあ」

俺は済し崩しに平沢にギターを教える事になった。

軽音部での日々1

↳後日・教室

和「へえ、唯って軽音部に入ったんだ」

唯「私、ギター弾くんだよ」

和「え？唯ギター弾けないでしょ？」

唯「うん、弾けないよ。でもねトモ君が教えてくれるんだ」

和「中川君ギター弾けるの？」

智也「まあたしなむ程度は」

和「大変でしょうけど頑張ってるね」

智也「……ああ」

↳音楽室・放課後

唯「うん、おいしい。」

明久「本当においしいね。僕のカロリーが満たされていくよ」

明久その言葉にお前の命が危ない気がするんだが……

智也「本当においしいな……って練習……」

……いや、その前に平沢ギターは？」

普通にケーキ食べてる場合じゃなかった。

唯「へっ？」

律「じゃあ、今週の日曜にギター見に行くか！」

智也「それがいいだろうな。それがないと練習もできないしな」

唯「ねえ、トモ君のギター見せて！」

智也「ああ。これだ」

漣「ESPホライゾン!？」

智也「ああ」

漣「へえ、凄くいいギター持つてるんだな！」

智也「あ、ああ。秋山……近い……」

漣「ご、ごめん／＼／＼」

紬「漣ちゃん……中川君……」

唯「ムギちゃん……？」

律「なあトモ！なんか、弾いてみてくれよ！」

紬「私も中川君のギター聴きたい！」

明久「僕も聴きたい」

智也「別に良いけど……あまり期待するなよ」

俺はギターを担ぎ、1曲演奏する。

紬「中川君すごい」

唯「本当に凄いねトモ君」

明久「智也は本当に凄いね」

漣「さすがは、中川……智也……だな／＼」

恥ずかしいなら名前で良いのに。ってか名前を呼んだだけで顔赤くなるのか？

そりゃ少し恥ずかしいかもしれないけどそこまで？

ちよつと聞いてみるか……

智也「なあ田井中？」

律「なに？てか『律』で良いって言ってんじゃん」

昨日、俺と平沢は改めて自己紹介をし、

その時に田井中が俺の事を『トモ』と呼びだした。

それを聞いた平沢が『トモ君のほうが良い』なんて事言ってたが
まあ呼び名なんて今さらどうでも良いが……
もう平沢であきらめた。大丈夫。俺が慣れれば言いだけの事だ！
で、その折りに平沢と田井中が『名前で呼べ』と言ってきたが
さすがに女子の名前を呼び捨てで呼ぶのは少し抵抗がある。
だから、今は苗字で呼んでいるのだが……

智也「まあ気にしないでくれ。それよりちょっといいか？」

律「結構重要なんだけどな……」

手招きすると愚痴りながらも俺のそばに来た
田井中に秋山に聞えないように小声で話す。

智也「(昨日から思っていたんだが秋山って

もしかすると人見知りとかするタイプか?)」

律「(ん?ああ するよ。それに今なら人見知りだけじゃなく、
恥ずかしがり屋、寂しがり屋、怖いものはダメ、
負けず嫌いという4点セット付きだ)」

智也「(…なんだよ『今ならお買い得』みたいな言い方は…)
なるほど、そんな性格してたんじゃ昨日あったヤツの
名前を呼ぶだけで赤面するわけだ。しかも俺男性だし。

チラッと秋山を見てみると…

漣「…?」

『何の話をしてるんだ』と言わんばかりの表情をしていた。

律「(それに…)」

智也「(ん?)」

律「(トモが不機嫌そうな顔してるからじゃないのか?)」

若干ニヤけながらそんな事を言ってくる。

智也「(昨日も言ったがこの目は生まれつきだ!」

傷は小学校の時に出来たんだ!

俺だって・・・俺だって・・・こんな顔・・・)」

律「ちよっ!?!ひとまず落ち着けトモ」

智也「これが落ち着いてられるか!?!」

律「もし生まれつきだとしてもそんな顔してたら

相手に誤解されるよな?という事で笑ってみましょう!さあ笑うんだ!」

そう言って俺の頬に手を伸ばし無理矢理笑わせようと引っ張る。

ゲニッ

智也「コラ…何する」

漣「律ッ?」

律「笑顔の練習だよん」

んなことを笑顔で言ってくる田井中。

そして急に俺の頬を引っ張り出した田井中に困惑の声をあげる秋山。

とりあえずやらねばなしは性に合わないので反撃に出る事に。

グイッ

智也「田井中こそ少しは女らしくしたらどうだ？…この口調とかな」

そう言い田井中の頬を引っ張る俺。

漣「中川君ッ？」

律「にやにおうう！このツリ目！」

智也「カチューシャ」

律「ヤンキー」

智也「俺はヤンキーじゃねえ！」

お互いの頬を引っ張り合いながら口論？する俺達。

…と

漣「…クスッ あはは！」

笑い声が聞えてきた。

漣「あはははっ！」

智也「ん？」

律「…漣？」

漣「ご、ゴメン…なんだか2人がおかしくって…あははっ！」

目に涙を浮かべながら俺達を見て笑う秋山。…ツボに入ったようだ。

智也（…笑うと可愛いな）

初めて秋山の笑顔を見た。

律「全くトモのせいで漣に笑われたじゃないか」

同じく笑いながらそんな事を言う田井中。

智也（…いや 先に仕掛けたのお前だろ）

そう思ったが口に出さなかった。

せっかく秋山が笑ってんだそれはヤボだな。

そして今度の日曜日、皆で平沢のギターを買いに行く事になった。

軽音部での買い物

〈待ち合わせの商店街〉

休日の街を1人で待っている。

今日は平沢のギターを購入するために、

軽音部員と待ち合わせしているためである。

まだ時間があるので音楽を聴きながら待つことにした。

数十分待つこと

全員揃ったので楽器店に向かうため俺達は商店街を歩いていた。

ちなみに女性陣は横一列で歩いており、

俺と明久はその列後ろで歩いている。

何故かって？そりゃ恥ずかしいからだよ。

女子4人に対し男2人だぜ！

しかも中学時代女子と買い物なんて行った事ないから恥ずかしいし。

紬「お金は大丈夫だった？」

唯「うん。お母さんに無理言って5万円前借りさせてもらったんだ」

智也（それだけあれば何とかなるな）

琴吹と平沢の会話が聞えてきたので、俺がそんな事を考えていると…

唯「ちよつと見るだけ」

平沢の声が聞えた。

智也（何だ？）

明久「どうしたんだろ？」

とある洋服店に突入する平沢。

呆れながらもちゃっかり付いて行く田井中。

笑顔で洋服店に足を運ぶ琴吹。

その場に残る秋山。

こんな状況だった。

智也「なあ 秋山？」

漣「何：中川？」

智也「帰っていい？」

漣「ゴメンそれだけは勘弁して……」

秋山は涙目になりながら懇願してくる

智也「冗談だ」

とりあえず突っ立ってる訳にもいかないので…

智也「とりあえずアイツ等の事頼んでいいか？」

俺はその本屋にいるから」

漣「え？行かないの？」

智也「いや、だって、あそこは女性の服を扱う店だろ。

男子の俺らはさすがに入りにくいし……だから、頼む秋山。
そこは察して欲しい」

漣「そうだな。わかった。すぐに連れてくるから」

智也「…了解」

そう返事し、秋山は平沢達の後を追ひ、俺と明久は…本屋に向かった。

おそらく秋山の性格上すぐって言うのは無理だろうしな。

……

本屋で新刊のチェックをし、音楽雑誌と漫画を立ち読みしていたら…

漣「お待たせ…」

申し訳なさそうな顔をした秋山がやって来た。

智也「ああ、大丈夫。ひとまずお疲れさま」

パタンと雑誌を閉じながら答える。

智也「さあ 行こうぜ」

漣「うん……」

明久「お疲れさま秋山さん」

今度こそ楽器店へ………

………が、その後も平沢と田井中、便乗する琴吹に振り回され、

雑貨店、デパ地下、ゲーセン等々………最終的には秋山も楽しんでいた。

まあ俺も明久も楽しんでいただけ。

今度は休憩のため、喫茶店に入店する俺達。

………

唯「はあく疲れた〜」

律「へへ〜買った買った〜」

紬「楽しかったですね〜」

口々に言う面々。更に…

唯「次どこ行こっか〜？」

明久「どこがいいかな？」

平沢が目的地は1つしかないのにそんなこと言う。

なので…

智也・透「「楽器だ 楽器」」

と、俺と秋山の声が重なる。それを聞いた平沢は…

唯「あっそうか 何か忘れてると思ってたら…ギターだ」

智也「おい、お前ら寄り道しすぎなんだ」

流石にツツコまざるを得ない。

律「でも、智也だって楽しんでたじゃないか。

その手荷物見ても説得力ないぞ」

智也「うっ……」

俺の隣にはゲーセンでとったぬいぐるみなどが入った袋が置かれてあった。

いや、だってゲーセン行ったんだぞ。

ブツとらないと……しかも今日は運よく結構取れたし。

… 紆余曲折ありながらもようやく本来の目的地に向かうことに…

〈 10 G I A 〉

透「女の子ならネックが細いやつがいいぞ」

唯「あ、このギターかわいい」

智也（聞いてないな……）

明久「それ、25万するよ」

唯「さすがに手が出せないや……」

智也「向こうに安いやつがあるぞ。」

ストラトとかテレキャス系とか色々・・・」

智也（動く気配なしだな・・・）

紬「そのギターが欲しいの？」

唯「うん・・・」

漣「私も、あのベースが欲しかった時こんな感じだったな。」

回想からすると、何か秋山のは違う気がするよつな・・・

律「私も、あのドラム買うために

値切って値切って・・・」

店員さんの涙が眼に浮かぶ・・・

漣「店員さん、泣いてたぞ。」

やっぱりな。

紬「あゝ、値切るって？」

律「欲しい物を手に入れるためにマケてもらおうとさ!!」

そこはドヤ顔するところなのか？

紬「何か、懂れます」

智也「いや、懂れるか？」

律「じゃあ、みんなでバイトするか！」

漣「バイトってどんなのするんだろ……………」

（音楽室）

律「うん、じゃ、ティッシュ配りとか？」

漣「……………無理そう……………」

明久「ファーストフードとかは？」

漣「それも、無理そう……………」

智也「じゃあ、これならどうだ？」

唯「交通量調査のバイト？」

智也「これなら日給もそこそこ良いし、

短期バイトだから部活にも影響しないだろうしな」

漣「うん、これなら大丈夫！」

こうして、何のバイトするかは決まった。

軽音部での買い物（後書き）

少し皆さんにお聞きしたいのですが
バカテスキャラとけいおんキャラのカップリングですが、
どのカップリングがいいとか希望はありますか？
これはまだカップリングを決めていないので
その参考にしたいと思っています。
また、その時ハーレムありにすべきかも悩んでいます。
その件も含めて感想をいただけると嬉しいです。

アルバイト

〔教室〕

和「バイト？」

唯「うんっ！ギター買ったために！軽音部のみんなも協力してくれるんだ」

和「え！？みんなを巻き込んで！？」

唯「うんっ」

和「じゃあ…中川君も？」

唯「？…そうだよ、トモ君も」

和「そうなんだ…意外…」

智也「ん？どうしたんだ真鍋？俺のこと見て？」

何か俺の顔についてるのか？」

和「いや…中川君が唯のためにバイトするって少し意外だなんて思ってた」

智也「そうか？」

和「中川君ってなんだかめんどくさがりな感じがしたから…」

智也「失礼だな…」

そりゃ確かに少しはそうだがそこまで言われる筋合いはないぞ。

智也「まあ、今は軽音部のメンバーだからな。

メンバーが困ってるんだから手伝わないとな。

それに俺は平沢にギター教えないといけないんだから頼まれたことはちゃんとやらないとな」

和「クスツ、そうなんだ。じゃあいつか私も何か頼もうかしら」

智也「・・・俺に出来る事なら」

唯「トモ君は優しいからね」

陽一「そうなんだよ智也は優しいからね」

と、平沢と……

智也「…誰だっけお前？」

陽一「お前の親友の春原陽一！！親友の名前忘れるなよ！！」

智也「え？親友？誰ソレ？」

陽一「……」

…ん？ 黙った…？

いつもなら騒音問題レベルの声で反論してくるのに…

陽一「ふう？」

と息を吐き『やれやれ』と手を上げ首を左右に動かす陽一。
…何だコイツ？

陽一「こつゆつところが素直じゃないんだよな？

良いかい？唯ちゃん、和ちゃん。

コイツはあんな事言ってるけど、照れくさいだけなんだよ」

智也「……………」

唯「うんうん」

和「若干そんな気はするわね」

陽一「でしょ？つまり智也は……………」

そこで俺を指差して

陽一「ツンデ」

智也「うせろっ！…！」

シユダダダダダダダッダダダダッ！！

176 HIT

俺は瞬時に陽一の懐に入り込み、CLNNADの智代並に蹴りを叩き込む。

陽一「ウゴア！…！」

智也「誰が何だつて？もう一度言ってみろ」

口を押え悶え苦しむアホにすごみを利かせる。
するとアホは…

陽一「…ッ、ツンデレ…」

シュダダダダダダダダダダダダダダダダッ！

296 HIT

俺は再びを陽一に向けて蹴りを繰り出し黙らせた。

陽一「ウベエ！！」

智也「黙ったか」

唯「陽一君が死んじゃった？！！」

和「多分大丈夫よ」

慌てる平沢とやはりどこか冷静な真鍋。

ちなみに真鍋の言う通りだな。

コイツはG並みの生命力を誇るからな。

智也「あつ、そうだ。俺このバカに用事があったんだ」

唯「なんの用事？」

智也「今度のバイトこいつにも手伝わせようと思ってな。

まあコイツならバイトの日当日に呼び出しても大丈夫か」

（バイト当日・とある道路前）

週末の休日。

集合場所に集った俺は

スタッフから預かっていたカウンターを皆に配る。

智也「じゃあ4人は2人ずつのペアで

1時間ごとに交代しながらやってくれ」

透「え？中川と吉井はどうするんだ？」

智也「俺と明久は別の場所で行るから。

それにスケッチ呼んでるから大丈夫だ」

唯「それって陽一君のこと」

智也「そうだ。じゃあしつかりやれよ。

秋山大変だろうけど頑張つてな。何かあれば俺に連絡してくれ」

透「ああ、わかった」

俺はこの場所を4人に任せ、別の場所へと向かう。

陽一「ねえ？なんで僕がここにいるわけ？」

智也「そんなの簡単だ。手伝えせるためだ」

明久「当たり前前の事聞かないだよ」

陽一「僕、一言もやるなんて言っていないよね」

智也「大丈夫。お前の意見なんて聞く耳無いから」

陽一「鬼！悪魔！！」

智也「……上手くやったら部活のメンバーに

お前のこと紹介しないわけでもないが」

陽一「僕達親友だろ！手伝うに決まってるじゃないか！」

本当に調子いいな。

1日目は陽一をからかいながら終了した。

2日目は陽一^{バカ}が途中で逃亡しようとしたが、
『男が約束破ると女子にモテないぞ』と冗談交じりでいうと、すぐ
に戻ってきた。

3日目は琴吹が急用という事でこれなくなったので、
ここを明久と陽一に任せ女子のスケットに向かった。

そして、

日給8000×3×7＝合計168000円

まだ足りないな。

智也「さすがに疲れた」

紬「昨日は本当にすみません。家の用事でそうしても抜けられなくて」

智也「いや、家の用事なら仕方ないさ。でも、まだ足りないな」

明久「どうする？」

透「あと何回かバイトするか・・・」

唯「あの・・・」

智也「ん？どうした平沢？」

唯「やっぱり、これはみんな自分のために使って！」

智也「いいのか？」

唯「うん・・・」

明久「けど、それじゃ欲しいギター買えないよ？」

智也「じゃあ陽一のみだけ使うとするんだ」

陽一「なにっ！」

唯「早く、皆と練習したいから・・・。

だから、もう一度楽器店に付き合ってくれろ？」

こうして、軽音部+@によるバイトでギター購入作戦終了

〈10GIA〉

智也「ムスタングとかどうだ？一応、初心者向けのやつだぞ。って・
・・・」

結局、あのレスポールに行くのか。
よっぽど気になるんだな。

唯「あつ… エへへ…」

俺達の視線に気付き、曖昧に笑みを浮かべる。

漣「よほど気になるんだな」

律「ヨッシャ！やつぱまたバイトを…」

智也「だな。今度はより金が良いところを探すか」

明久「そうだね。今度は何する？」

紬「あつ… ちょっと待ってて？」

智也「ん？」

秋山の言葉に田井中が再びバイトをするかと意気込んで

俺がバイト先を探そうとしよう時

琴吹が何かを思い付いた様子で店員の所に歩いて行った。

店員と接触し話し出す琴吹。

漣「…何やってるんだ？」

智也「さあ…？……………あれ？なんだか店員が慌てだしたぞ？」

漣「何があつたんだ？」

智也「……………わからん」

秋山と会話をしていると店員と話していた琴吹が戻ってきた。

紬「そのギター5万円で売ってくれるって」

皆「……………」

律「えっ！？マジで！？」

唯「何！？何やったの！？」

智也・漣「……………」

琴吹の口から突如告げられた『5万円価格宣言』に

驚愕の声をあげる田井中と平沢。

そして絶句状態の俺と秋山と明久。

だってこれ25万するんだぞ……それを5万って

紬「このお店、実はうちの系列のお店で」

智也「…マジかよ…」

唯「そ、そうなんだ…ムギちゃん、ありがとう！

残りはちゃんと返すから！」

何者なんだ琴吹って？

まさか本当に令嬢なのか……まさかな。

平沢は感激の表情でギターの前に座り込む。

律「よかったな？唯」

唯「うんっ！」

智也「これで楽器が揃ったな」

紬「そうですね」

律「よしっ！唯！家に帰ったらしっかり練習するよっに！」

唯「まかせといて！りっちゃん隊長！」

互いにビシッと敬礼する田井中と平沢。

こうして、平沢は何とか念願のレスポールが手に入ったとき。

めでたし、めでたし

〈平沢家・side〉

遂に、あのギターが手に入ったんだ！
これからは、いっぱい練習しなきゃね！！

唯「ギユイイン！！！」

うわぁ、ミュージシャンみたいでかっこいい！」

憂「お姉ちゃん、うるさい・・・」

唯「あ、ごめん憂・・・。つい、興奮しちゃって・・・。」

だって、凄く欲しかったギターが手に入ったんだよ！
名前は、何ていうんだっけ？

一日も早く、トモ君に追いつかなきゃ！
色んなこと教えてもらわないとね！

〈後日・音楽室〉

皆「おおおおお~~~~！！！！！！」

智也「ギター持つとそれっぽいな」

律「似合ってるぞ、唯！」

唯「えへへ・・・ねえ、ライブみたいな音出すにはどうするんだっけ？」

智也「アンプに繋ぐんだ」

平沢は、レスポールをアンプに繋いで弦を適当に弾いた。

ギューイーン!!!

それは、軽音部というなのライブの始まりの音に聞こえた。

漣「やっとスタートだな。私達の軽音部・・・」

智也「ああ。そうだな。」

明久「頑張らないとね」

律「夢は、武道館ライブ!!!!・・・卒業までに!」

智也「今のままじゃ無理だろ」

律「おい!」

俺らがグダグダ喋っていると、平沢が・・・

唯「アンプで音を出すのはもう少し先だね・・・。」

智也「ば、馬鹿、ボリューム下げろ!!!」

唯「へっ!・・・ギーーーーーン!!!!!!・・・」

俺は、とっさに耳を塞いだ。が平沢は至近距離で直に聴いたのでグロッキーだ。

漣「アンプから抜く前に、ボリューム下げないとこっとなっちゃうんだよ〜・・・」

唯「それを先に言って・・・・・・・・・・」

智也「・・・あつぶねエー」

唯「トモ君するい〜・・・。」

相変わらずのグダグダさ・・・。

けど、ようやくスタートなんだよな・・・俺らのバンド。

アルバイト（後書き）

まだまだカップリング案募集中です。

色々案をいただけると嬉しい限りです。

もちろん智也と明久だけではなく

秀吉や康太でもかまいません！

これからも応援よろしくお願いします。

軽音部での日々2

〈放課後〉

和「唯」

唯「あっ 和ちゃん」

和「一緒に帰ろう」

唯「ゴメン？ 部活に行かなきゃいけないんだ」

和「そうなんだ…それじゃあ仕方ないね。

ちゃんと部活頑張っているのね」

唯「今日はムギちゃんが美味しいお菓子持ってきてくれるんだ」

和「えっ？」

智也「……目的違うだろ」

唯「あつトモ君！」

智也「じゃあ部活行くぞ」

唯「うん！じゃあ和ちゃんまたね」

智也「じゃあな」

和「うん またね唯、智也」

真鍋に別れを告げ、部活に行くために教室を出る。
もちろん向かうは軽音部室。

ガチャ

唯「こんにちは〜」

智也「ちわっす」

挨拶をして音楽室に入る。

中には俺達以外の4人が既にいた。

律「ようっ!」

透「こんにちは」

紬「いらっしやい〜」

明久「いらっしやい」

と4人から挨拶が返ってくる。

紬「唯ちゃん、智也君。紅茶は熱いのと冷たいの、どっちが良い？」
と琴吹が聞いてきた。

唯「私、熱いの！」

智也「俺は冷たいので」

俺と平沢は琴吹の質問に答え席に着く。
席には田井中と秋山、明久が座っており、
3人の前にはティーカップが置いてあった。

つてか俺今普通に答えただけ

智也「なあ 秋山」

漣「えっ 何？」

秋山は話がフラれるとは思わなかったんだろう。
少し驚いていた。

智也「ここは軽音部だよな？」

漣「あーっ、うん……そうなんだけど……」

俺の言いたい事がわかったんだろう、苦笑いを浮かべ肯定する。

智也「なんでお茶が出てくるんだ？」

明久「いいじゃん別に。僕としてはカロリーが取れるだけで幸せだよ」

智也「明久はまずはゲームとかの出費を抑えろよ」

明久「……………今月は誘惑が多くて」

智也「今月もだろ……………」

……………

唯「ねえねえ 何で澪ちゃんはギターじゃなくてベースをやるうと思ったの?」

席に着き琴吹が淹れる紅茶を待っていると平沢が秋山に質問をする。

澪「だってギターは……………は、恥ずかしい……………」

智也「恥ずかしい?」

澪「ギターってバンドの中心って感じで、

先頭に立って演奏しなきゃいけないし、観客の目も自然と集るだろ?」

……………自分がその立場になるって考えただけで……………」

ボフンツ！

唯「漣ちゃん!!」

頭から煙を出し、倒れる秋山。

智也「おい！大丈夫か秋山!？」

律「それより言った通りだろ？」

智也「何が？」

律「これが、漣の持つスキルの1つ『恥ずかしがり屋』だ！」

いや、確かに前にも言ってたが何故にドヤ顔なんだ？

にしても……………

智也「繊細過ぎやしないか？想像しただけで、アレって……………」

律「そうなんだよな。少しでも直ってくれと良いんだけどな。どうするかな。」

いっそトモに任せてみるか（ボソツ）

田井中は秋山の繊細さが心配らしい。

…意外と友達想いなところあるんだな……
最後は何かつぶやいていたが……

紬「お待たせ〜唯ちゃん！智也君、お茶が入りましたよ〜」

俺と平沢の前に紅茶が置かれる。

すると平沢は今度は琴吹に……

唯「ムギちゃんはキーボードうまいよね。キーボード歴長いの？」

紬「私、4歳の頃からピアノを習ってたの

コンクールで賞をもらったこともあるのよ」

唯「へっ！？へえーすごいねえ！」

確かにそれは凄いな。

コンクールで賞をとるくらいの実力を持つてるなんて……

唯「アキ君はキーボードいつから習ってるの？」

今度は明久に質問してきた。

明久「僕は小学校の時かな。母にすすめられてね。

中学のときまで少しやってた程度だから、琴吹さんと比べると全然だよ」

唯「それでも少しはできるんだよね。凄いよ」

明久「そうかな」

紬「さあ いただきましたよ」

気がつけば目の前に、ケーキやらクッキーが並べられていた。

…だからここ軽音部だよな？

てか良いのかよ、学校でこんなことして…

唯「疑問に思ってたんだけど…」

平沢、やっとお前も気付いたか…

そりゃそうだ。目の前にこんだけのもんが並んだらいくらなんでも
気付くよな…

唯「この部屋ってやけに物がそろってるよね。ティーカップとか」

明久「あ、そういえばそうだね」

智也「そっちかよッ！！って明久お前もか！？」

唯「えっ！！トモ君どうしたの！？」

明久「い、いきなり大きな声出さないでよ。ビックリするじゃない
か」

智也「いや…わるい…やはり俺の考えは甘かったんだと

再び実感してしまって声をあげてしまった…」

ここでは多分俺の勘違いなんだ。

これが正しいんだ。そうに違いはない！ってかそう思おう！

明久「で、ここの物ってどうしたの？」

紬「ああ、それは私の家から持ってきたの」

智也「自前なのか!？」

その後俺は彼女達の会話を紅茶を飲みながら受け流していた…

テスト前

（下校中）

部活も終わって下校中。

今日は珍しく唯と一緒に帰っている。

唯「確かこうだったよね」

平沢は先ほどまで俺が教えていたギターのコードの押さえ方を練習していた。

智也「そうだな。家に帰ってからでも練習しておけよ」

唯「了解です隊長！」

智也「誰が隊長だ」

そこへ

和「唯！中川君！」

唯「あ！和ちゃん！」

平沢は真鍋に向かって手を振る

和「……何それ？新しい挨拶？」

平沢の手は先ほど教えていた
コードの押さえ方のままの状態だった。

唯「今日はねトモ君にね。」

ギターのコードについて教えてもらったんだ〜」

和「そうなの」

唯「うん。それで練習中に何度も指がつつちゃったんだ〜」

和「へー頑張ってるのね」

唯「それでトモ君に指のストレッチの方法を教えてもらったんだ〜」

そこで平沢は俺が教えたストレッチをやってみせる。

和「あまり無理しないでね唯」

智也「なあ〜真鍋は平沢の幼馴染なんだよな?」

和「え?そうよ」

智也「やっぱり勉強とかも教えたのか?」

和「そうね。泣き付いてくる事が多かったからね」

智也「放課後部活でアイツに教えているんだが……疲れる」

和「あ〜」

真鍋は俺の言葉に納得するように答える

智也「ぶっちゃけ真鍋が凄いなと思うよ。

よく今まで教えてくれたな」

和「そうでもないわよ。それに中川君だって吉井君や春原君に

勉強教えてきたんじゃないの？」

智也「そうだが、あいつらには手を出していたからな。

それにどうしようもない時はメモだけ渡して勝手にさせてたし。

さすがに平沢にはそんな事できないしな……」

和「私から言えることは根気強くやることね」

智也「それしかないよな」

唯「ん？どうしたの2人とも」

智也「なんでもないぞ」

和「なんでもないわ唯」

唯「そう？そういえば和ちゃん今日は帰るの遅いなだね」

和「うん、図書室で中間テストの勉強してたから」

智也「そういえば、中間テスト近かったよな」。

メンドクサイが勉強しないわけにもいかないしな……
まあやるなら1番になってみたいしな。

そういえば確か文月学園の試験は特殊で試験時間内なら何問でも解けるんだよね？」

和「そうらしいわね。」

でも今度の試験は上限100点の試験らしいわよ」

智也「そうなのか？なんだ少し期待してたのに」

和「中川君って成績良い方なの？」

智也「まあそこそこだな。中学では上位に名前があつた程度だ。」

真鍋はどうなんだ？」

和「私もアナタと同じ感じよ」

智也「なら、今度のテストの総合点数で勝負しようぜ。」

負けたほうが昼おごりで」

和「まあいいわよ。受けて立つわ」

智也「お！乗りいいな！てっきり断られると思つたんだが」

和「まあたまにはこういうのもいいかなって思つてね」

智也「なら、決まりだな」

和「ええ」

唯「そっか？テストか？って、ええ！？テストおお！？」

智也「驚きすぎだろ……つてか反応も遅いな」

唯「え？もうテストの時期なの？」

和「いえ、まだもう少しあるわね」

唯「あ、そうなんだ〜私ビックリしちゃったよ〜」

智也「まあまだ日にはあるから今から勉強しとけば大丈夫だろ」

唯「そつかあ……もう中間テストなのかあ……」

せつかくギター練習しようとしてたのに」

和「……………」

智也「その心意気はいいな」

和「…あんた今まで試験勉強なんてしたことなかったじゃない」

唯「そつかーなら大丈夫だネ」

和「いや…大丈夫じゃないけど……………」

智也「……………心配だな」

中間試験

（試験日当日）

カリカリ…

シャーペンが踊る音を奏でる。

5月下旬。

高校生になり初めての中間テスト真っ最中。

智也（出そうなどところをかなり絞って勉強したからな。

おっ！この問題もやったな）

カリカリカリカリ…。

まあ、これならなんとか大丈夫か？

.....

陽一・唯「……………」

（テスト終了後）

俺と真鍋の前には真っ白になった平沢と陽一の姿があった。

和「テスト…ダメだったの？」

そんな2人を見て真鍋が問い掛ける。

唯「…うん」

陽一「…さっばりです」

智也「平沢はともかくお前は予想通りだな」

唯・陽一「……………」

その一言を答え気力を尽くしてしまつたかのように再び黙り込む。陽一もいつものように反論せず黙り込んでいた。

和「中川君は？テストどうだったの？」

智也「数学と英語は自信あるな。」

ただ国語だが古典が出てたから少しやばいかもしれないな。そういう真鍋はどうなんだ？

和「私は、まずまずかしらね」

そう言う奴ほど良い点取るだよな…

智也「まあ後はテストが帰ってきてからの楽しみだな」

和「そうね。どちらが勝つてるかしら？」

智也「それもお楽しみだな」

（テスト返却日）

教師から名前を呼ばれ次々とテストが返ってくる。

そして次は『す』の順番が来る。

教師「春原」

陽一「ハヒイ！」

智也（声裏返ってんぞ）

陽一は緊張してなのか手と足が一緒にでるといふ動作で教師の元に向かう。

そしてテストを貰い…

春原「……」

真っ白になった。

何点だったんだ？まさか赤点なのか？

ゆっくりした足取りで席に戻り席に倒れ伏した。

教師「中川」

いつの間にかに俺の番までやってきていたので俺はテストを取りに行く。

結果は

国語	66点	数学	100点	英語	100点
社会	83点	理科	86点		

総合435点

智也（数学と英語はよくできたな。でも国語がよくないな）

俺がテストを見て考えていると

教師「平沢」

平沢「ハ、ハイッ！」

いつの間にか平沢が呼ばれていた。

陽一と同じような動作でテストを貰いにいく平沢。

平沢「……」

テストを返してもらった瞬間真っ白に。

教師「真鍋」

和「はい」

キビキビとした動作で教師の元に行きテストを貰い、
満足げな表情で席戻る。

智也（あの表情じゃ点数良かったんだな）

.....

智也「で真鍋、どうだった点数は？俺は総合で435点だ」

和「私は476点よ。私の勝ちね」

智也「うげっ！476点！！9割いつてるじゃないか！？」

クッソー…！凄いな真鍋は。俺は国語で足引っ張ったな」

和「国語はいくつだったの？」

智也「66点。数学と英語でせつかく満点取ったのに

国語が悪すぎた。古典の問題さえ出てなければな」

和「え？満点2つも取ったの？凄いわね」

智也「まあでも負けは負けだ。今度メシおごるわ」

和「ええ、お願いね」

智也「で、その2人はどうだったんだ？」

和「聞かなくても分かるわね……」

智也「まあな……」

俺と真鍋の前には真っ白になった平沢と陽一の姿があったのだった。

中間試験（後書き）

まだまだカップリング案募集中です。

これからも応援よろしくお願いします。

試験後の部活

〔部室〕

俺は魂の抜けかかった平沢をつれて部室に来ていた。

部室にはもう皆揃っていてお茶を飲んでいた。

俺も平沢も琴吹にお茶をお願いして席に着いた。

律「やっとテストから解放された〜」

明久「疲れた〜」

紬「高校になって急に難しくなつて、大変だったわ」

智也「そうだな……そして、もっと大変そうなやつがここに……」

そう言つて俺はドンヨリしたオーラを出す平沢を指差す。

漣「そんなにテスト悪かったのか？」

秋山がおそるおそる平沢に尋ねる。

唯「……ふっふっふっ……」

智也「………ついに壊れてしまったか」

物悲しい笑みを浮かべ真夜中なら秋山が卒倒しそうな声を漏らす平沢。

唯「クラスで2人…追試だそうです…しかも全科目…」

漣・律・紬「うわぁ…」

答案用紙を見せやはり物悲しそうな笑みで伝える。

ちなみに赤点（追試）になるのは30点以下の点数の時です。

律「ん？2人？…という事は…？」

律はそういと皆が俺のほうを見てくる。

智也「俺じゃねえよ」

明久「だ、だよね」

律「だよな〜トモじゃないか！じゃあ誰？もう1人？」

智也「虫以下の人物だ」

律「誰それ！？すげえ気になる！！」

智也「気にするな。気にしたら負けだ」

明久「なんだ陽一か」

智也「そういう明久や田井中はどうなんだ？

秋山と琴吹は大丈夫だろうが…」

明久「あ、僕はもちろん追試だよ！」

明久は隠すことなく宣言した。

智也「いや、なに堂々と言ってるんだよ」

明久「あははははっ!!」

智也「笑い事じゃないだろ」

紬「だ、大丈夫よ!今回は勉強の仕方が悪かっただけじゃない?」

漣「そうそう!ちょっと頑張れば追試なんて余裕だつて!」

智也「そうだな。頑張れば追試なんて余裕だつて」

琴吹と秋山が追試組を励ましてた。

唯・明「勉強は全くしてなかったけど……」

紬「あはは……」

智也「励ましの言葉返せ!」

俺達の激励を自業自得な理由で返す。

……

律「何で勉強しなかったのさ」

唯「いや〜…しようと思っただけけど…」

なんか試験勉強中ってさ勉強以外の事に集中できたりしない？」

律「あ〜それはあるな。部屋の掃除はかどったりな」

明久「うん、あるね」

唯「勉強の息抜きにギターの練習したら抜け出せなくなちゃって

結局全然勉強できなかったの〜」

明久「僕は息抜きにゲームしてたら気づいたら朝だったんだ」

智也「おい、明久…お前ってヤツは……………」

もう明久の発言にはあきれるしかなかった。

智也「平沢は…少しは上達したのか？」

平沢「うんっ！おかげでコードいっぱい弾けるようになったよ！」

『どつだつ！』とも言わん限りの堂々とした表情でVサインをつくり威張る。

智也「威張るところじゃないからな」

秋山「その集中力を少しでも勉強に回せば…」

秋山がポツリと呟いた。

明久「田井中さんはどうだったの？」

律「私か」

正直、俺も気になっていたところだ。

律は俺たちにテストを見せる

智也「えつと、国語85点、数学72点、英語70点

社会87点、理科81点、総合395点」

ふう〜なんとか田井中には勝っていたか。

唯「こんなの、りっちゃんのキャラじゃない……………」

明久「だね。ちょっとガツカリだよ……………」

律「おい、どういふことだそれ!？」

智也「悪い、俺も正直驚いてる。

だって田井中がこんなに点数が良いなんて」

律「これくらいは余裕だ」

漣「へえ〜テスト前日に私に泣きついて来たのはドコの誰だってけ
？」

律「漣!それは内緒だろ!」

智也「なんだ、そういうことか。なら納得だ」

その後、試験が終わったということで雑談等を交わして部活終了となった。

追試 勉強会？

〔後日・音楽室〕

俺は部室で琴吹の入れてくれたお茶を飲みながらようかんを食べていた。

ガチャ

唯「あつ！今日はようかんだ」

明久「あ、本当だ！美味しそう」

職員室に行っていた明久と平沢が部室にやってきた。

唯「ん〜、ようかんおいしい〜」

平沢と明久は紬にお茶をもらいようかんを食べている。

智也「そういえば明久。職員室でなんて言われたんだ？」

明久「追試の人は合格点取るまで部活動禁止だった」

おー、そうか。

部活動禁止か……

.....。

皆「ええっ?!?!?!?!?!」

漣「結構厳しいな」

智也「おい、ならお前から来たらマズいだろ」

律「だよな。ここに居るのもまずいんじゃない?」

唯「大丈夫だよ。お菓子食べてるだけだし」

明久「カロリー摂取してるだけだから」

紬「でもそれって、まずいんじゃない?」

漣「そうだぞ唯に吉井。」

この部自体無くなっちゃうかもしれないぞ!」

智也「まあぎりぎり4人いるから大丈夫か」

唯「ヒドイよトモ君!」

智也「ならさっさと帰って勉強しろよ」

紬「それで、追試はいつなんですか？」

唯「ん〜とねえ、1週間後」

智也「1週間後か…。」

明久「1週間もあれば、毎日ここに来てもお菓子食べに来て大丈夫だよ」

唯「そうだよ〜1週間もあるもんね。大丈夫だよ〜」

律「…って大丈夫な訳あるか！」

そして、唯は律の首絞めの刑に遭っている。

智也「1週間しかないが正しいんだが？」

明久「うう…：…僕のカロリーのためだし、皆と練習したいからね。僕頑張るよ」

唯「私も皆と練習したい！だから頑張る」

智也「じゃあ、精々頑張ってくれ…ッ！」

秋山に殴られた。冗談のつもりで言ったんだがさすがに、人事すぎたか？

漣「人事じゃないんだぞ智也！」

智也「冗談だつて！まあ困った時は言ってくれれば助けてやるよ。

まあまじめにやってればだが……」

でも、平沢は頑張るとか言っときながら
勉強しないタイプの人間だろうな……？

「追試まであと2日」

漣「ちゃんと、勉強してるよね……唯と明久……」

律「だいじょう……心配になってきた……」

正直俺も、アイツらがだらけてる姿が目には浮かぶんだが……

するとそこへ

唯「……漣ちゃん助けて?!」

丁度その話の人物である平沢が救済を求めてやって来た。

漣「えっ!? 勉強してたんじゃないの……?」

唯「出来なかった……」

漣・律・紬「……ええっ!」

智也「……やっぱりか……」

律「……よしっ 今晚特訓だ!」

唯「本当!？」

律「澪に教えてもらえば確実に合格点取れるぞ」

智也「やっぱり成績良いんだな秋山」

澪「いや そんな…」

俺の発言にポリポリと頬をかき、恥ずかしそうに照れる秋山。

律「うまいんだぜ? 一夜漬け教えるの!」

澪「うおーい!! 普通に教えるよっ!!」

紬「どこで唯ちゃんの勉強をするの?」

唯「あつ ウチで良いよ。」

今日は両親いないし気兼ねしないで良いから

律「じゃあ唯の家で特訓するか」

律「そうだな〜そういえば唯ん家行くの初めてだな」

俺は行く気はないから帰って作曲でもやってみるかなあ…

その意志を伝えようと口を開こうとした時…

智也「…お 『パンツ!』……なんだ?」

急に部屋のドアが勢いよく開いた。

そこには…

陽一「……………」

唯「陽一君？」

切羽詰まった表情の…陽一が立っていた。

律「えっ？誰だっけ？」

田井中が疑問の声をあげる。

陽一「……………」

漣「た？」

陽一「助けて〜！！トモエもんっ！！！」

国民的な猫型ロボットの様な名を叫び、
その同居人の眼鏡少年みたいな声を出し、俺に駆け寄ってきた。

とりあえず…

ドゴッ！

陽一「ぎゃあっ！！！」

蹴っておく。

陽一「なにすんるんだ!!」

智也「おお悪い、ついつい蹴ってしまった」

陽一「そんな理由で蹴んなツ!!」

あと本気で悪いと思ってるのかツ!？」

智也「全く」

陽一「そこは全力で思えツ!!」

智也「うるせエな…落ち着けよ。平沢以外が驚いてるじゃねーか」

律「…漣・紬」「…」「…」

急に現われて俺に蹴られ、叫びをあげながら俺と話す陽一にポカんとする3人。

平沢はもう見慣れているので気にしていないが。

といち早く呪縛から解けた田井中が…

律「…だから誰だっけ?」

唯「春原陽一君。ホラ、私のギター買ってくれるときに一緒に手伝ってくれた」

律「ん?あつ!あゝいたな」

陽一「えっ忘れられていたの?」

智也「記憶に残らないほうが良いだろ。お前は」

陽一「んな冷たい事言つなよ」

智也「黙れ変態」

陽一「誰が変態じゃア!!」

智也「オマエ」

陽一「違エよツ!!」

自分の事だと分かってないアホに指差し親切に教えてやる。

とりあえずアホに目的を聞くか…

智也「で？ 何しに来たんだよ？」

陽一「おお、そうだった…助けてくれトモエもん」

智也「誰がトモエもんだ」

陽一「ヤバいんだって追試!!全く勉強できねエんだ!!」

智也「だろうな。予想してた」

陽一「な、なら……」

智也「一人で頑張れ」

陽一「ヒデエな!!」

どうやらコイツも平沢同様、追試の勉強が出来なかったらしい。そこで何故か俺に助けを求めてきたみたいだ。

唯「陽一君もなんだね…」

陽一「唯ちゃんもか…」

うんうんと共感する二人。

律「じゃあ陽一が赤点を取ったもう1人？」

田井中が以前平沢が言っていた『追試2人』発言を思い出し俺に尋ねてくる。

智也「ああそっだ」

もう隠す必要もないので頷く。

陽一「ヘルプ ミー 智也!」

智也「しかたねエな…」

鞆から1枚の紙を取り出し、ある3文字を書く。それを陽一に渡す。

陽一「ナニコレ？」

智也「退学届だ これに必要な事項を記入し、提出しろ。
そしたらもう勉強に悩む事はなくなる」

陽一「流石だな智也！！サンキュー！！」

バタンツ

俺手製の退学届を持ち部室から出ていく。

漣「智也…」

智也「すぐに戻って来る」

本気で退学しそうな勢いで部室から出ていった陽一に
秋山が心配そうに俺の名を呼ぶ。

バンツ！！

陽一「って退学するかアツ！！」

智也「ほらな？」

漣「う、うん」

見事なノリツッコミを披露し部室に戻って来るアホ。
やっぱコイツをからかうのは楽しいなあ。

その後、平沢達女性陣は平沢家へ、俺とバカは春原家に向かいそれぞれ勉強を教える事にしようとしたが、

平沢から『一緒に勉強しよう』と誘われたのでバカがそれに賛成し平沢家で勉強会を開くことになった。

そしてせっかくだから明久も呼ぶことになったが、

明久と一緒に勉強していた秀吉と康太。

そして3人に教えていた雄二も一緒に混ざることになった。

全員で10人こんな大人数大丈夫か？

追試勉強会？

平沢の家は、ごく普通の二戸建てだった。

律「へえ、ここが唯の家か。唯の部屋とか散らかってそうだな」

唯「そんなことないもん」

律「ほんとか？」

唯「ほんとだもん」

雄二「えつと…平沢だったか？良いのか俺たちまで一緒に…」

雄二の疑問ももつともだ。

俺達の人数は10人もいるんだ。さすがに迷惑だと思っるのが正しいだろう。

唯「大丈夫だよ雄二君！じゃあ、みんな上がって上がって。」

ちなみに先に自己紹介を済ませてある。

さすがに初対面の顔があるからな。

皆「……お邪魔します。」

憂「あ、お姉ちゃんおかえり。」

奥から平沢とそっくりな子が出てきた。

憂「あれ？お友達？」

唯「うん、そうだよ」

憂い「そうなの。初めまして。妹の憂です。姉がお世話になってます」

智也「久しぶりだね」

憂「あつ智也さん！お久しぶりです」

.....

自己紹介をし終わると今度はスリッパを並べ始めた。

憂「スリッパをどうぞ。」

本当にすごい出来た妹だな。

本当に姉とは正反対の性格に近いんじゃないか？

軽音部の皆が呆然としている。

唯「ありがとね、憂。ほら、みんなこっちこっち。」

人数が多いためリビングに案内する平沢は俺たちを呼ぶ。

康太「.....できた妹さんだ」

陽「ウチの妹にも見習って欲しいよ」

明久「優しそうな妹さんだね。」

姉さんもこうだったなら良かったのに（ボソッ）……」

秀吉「姉上もこれくらいじゃったら（ボソッ）……」

なにやら明久と秀吉がブツブツ言いながら遠い目をしている。

律「それにしても、姉妹でこうも違うもんかね」

唯「へ？どづいうこと？」

律「妹さんに唯のいいところ全部持っていかれたんじゃないのか？」

唯「ひどい！」

少し涙目気味で反論する平沢。

平沢妹がやってくる。

憂「あの、よかったら皆さんお茶どうぞ。」

買い置きのお菓子で申し訳ないんですけど」

雄二「……ほんとによくできた妹だな」

明久「本当だよ。平沢さんが羨ましいよ」

憂「いえ、そんな大したことじゃないですよ。」

謙遜する平沢妹。

お茶がみんなに配られる。

雄二「ところで平沢妹は何年生なんだ？」

憂「中3です」

秀吉「ワシらとは1つ違いじゃのう」

律「できからいうと、姉より上だな」

憂「そ、そんなことないです。」

お姉ちゃんなんか私よりずっとくいい人なんです！」

なぜか猛烈に姉をかばう平沢妹。

紬「受験生ですね」

琴吹は勢いにのまれ急な話題転換をする。

憂「はい」

明久「どこ受けるかもう決めてるの？」

憂「うーん・・・できればお姉ちゃんと同じ文月学園に行きたいんですけど、」

私の学力で受かるかどうか・・・」

本気で心配そうな顔をする。

そつえばお姉ちゃんっ子だからさつき必死にかばったのか。

智也「大丈夫だって。」

今、追試受けてる平沢や明久、陽一だつて通つたんだから問題ないつて」

律「唯に勉強教えてもらえばいいんじゃない？」

憂「え、それは・・・大丈夫です。自分でできるから」

さりげなく遠慮する。

律「あははは。断られたぞ〜。」

智也「だな。何気に結構ぐさつて来るんじゃないか？」

唯「え？何で、何で？」

憂「で、でもお姉ちゃんはやるときにはやる人です！」

とことんかばうな・・・

そして少し妹さんと話をしたあと

俺は平沢や陽一、明久、秀吉、康太の5人に勉強を教えている。

秋山、琴吹と協力して・・・

えっ？田井中と雄二はって？

それは田井中が途中で勉強にあきて平沢や明久、陽一をからかっていたので、

秋山が怒つたので今は雄二と妹さんと一緒にゲームして遊んでいる。

その途中、真鍋が差し入れのサンドイッチを持ってやってきた。

唯「あ、和ちゃん」

和「どう、唯？ちゃんと勉強はかどってる？」

唯「うん、おかげさまで。」

智也「嘘つけ、勉強はかどってなかったから

今日みんなでお前の家に来ることになったんだろうが」

平沢のセリフに訂正を入れておく。

和「あら中川君いたの？それにしても人数が多いわね」

智也「なんか最初の方にグサツとくる言葉があったような気がするけど置いて……」

俺はみんなを真鍋に紹介していく。

皆「……よろしく」「」

和「真鍋和です。唯とは家が近所で幼馴染なんだけど

高校では唯と中川君と春原君と同じクラスになりました」

丁寧にあいさつをする真鍋。

唯「和ちゃんとは幼稚園からほとんど一緒なんだよ」

和「不思議な縁よね。」

ああ、それよりほら、サンドウィッチ作ってきたわよ」

智也「ちようどおなか減つてたところなんだ。

助かるわくさすが真鍋だ」

明久「わくい。カロリーがとれるよ」

和「それにしても唯の部屋、全然変わってないわね。」

サンドウィッチを出した後、真鍋はぐるっと平沢の部屋を見てつぶやいた。

唯「そういえば和ちゃんが私の部屋に来るのって久しぶりだね。

あ、そうだ。ちようどいいからアルバムとってみんなで見よう」

智也「平沢、今何のために集まってるかわかっているのか？」

唯「分かってるよ。大丈夫、サンドウィッチ食べてる間だけだから」

康太「……………気になる」

秀吉「土屋の場合は違う意味のような気がするのう」

平沢はそういうなり自分の本棚からアルバムを取り出した。

唯「はい、和ちゃん」

取り出したアルバムを真鍋に渡す。

真鍋は渡されたアルバムを開いて思い出を語り始めた。

和「中学の時私がしばらく熱出して休んでたんだけど、

毎日唯がプリントを持ってきてくれたんだよね」

唯「私風邪ひいたことなくて」

和「でもね、その持ってきてくれたプリントの中に唯のテストが間違っ入っててね、

確かその時の点数が10点だったかしら」

智也「性格だけじゃなくて、点数まで変わってないとはな。

よくそれでうちの学校に通ったな」

和「確かに。でもあの時はすっごく助かったのよ」

唯「えへへへ」

平沢は、昔のことに対しての感謝に少し照れていた。

その後、お喋りを中断し勉強に戻った。

智也「よし、じゃあ、ここやってみろ」

唯「え〜と……………出来た！」

秀吉「……………なんとかできたのじゃ」

康太「……………疲れる」

明久「……………僕も」

陽一「……………出来たっ!!」

漣「これだけ解ければ合格点くらい取れるだろ」

琴吹「これで皆追試もバッチリね」

和「これなら大丈夫そうね」

唯「ありがと、漣ちゃんにムギちゃん！和ちゃん！……それに、トモ君も」

智也「ああ」

まあ、大丈夫だろう？皆で教えたんだから。何とかなるだろう。

↓数日後・音楽室↓

あ、今日は追試のテスト返しの日だったよな。

あいつらは大丈夫だったんだろうか？

俺は部室で琴吹が入れてくれたお茶を飲みながらそう考えていたら、部室の扉が開いた。

そこにはこの前勉強を教えた5人の姿があった。

智也「どうだったんだ結果は？」

明久「僕は大丈夫だったよ」

秀吉「ワシも大丈夫じゃったぞ」

康太「……………俺も大丈夫だった」

陽一「僕も何とか大丈夫だった」

唯「み、みんな……。ひゃ……。100点取っちゃった！」

澪&智「極端な子（奴）！」

何故か平沢だけは全科目100点という凄すぎる点数を叩き出していた。

琴吹「これで、追試は終わったわね。お疲れ様」

唯「ありがとう、ムギちゃん」

明久「やっとこれで僕のカロリーが」

智也「いやいや目的違っただろ」

琴吹「なら、お茶を入れますね。

木下さん達もいかがですか？」

秀吉「ワシらもよいのなの？」

康太「……………いいのか？」

智也「いいんじゃない？どうなんだ田井中？」

律「OKだぜ！ムギのお茶は美味しいからな」

智也「だよ」

秀吉「ならすまぬが邪魔するのじゃ」

康太「……………（コクコク）」

陽一「いただきます！」

智也「お前のはない」

陽一「ヒドイ！！」

琴吹「大丈夫ですよ春原さん。皆さんの分もありますから」

そして琴吹が皆の前にお茶を置いていく。

そして皆がお茶を飲み美味しいという声をあげていく。

智也「そういえば平沢コード覚えてたんだろ？」

ちよつと、弾いてみるよ。

C A m 7 B m 7 G 7 弾いてみる」

唯「バッチリさあ！XでもYでもなんでもござれ！」

ん？ 何だよソレ……………。

智也「……………お前もしかして…忘れたとかじゃ……………」

唯「……………その通りです……………」

智也「お前はどんな脳してんだよ」

漣「……智也……唯の事……頼んだぞ？」

智也「マジで!？」

唯「へっ?」

智也「『へっ?』じゃねエよ!また、振り出しじゃんかよ!

もう……疲れました……」

漣「私も少しは手伝うから……」

智也「……ああ、頼む」

秀吉「智也は大変じゃな」

康太「……頑張れ」

結局、今日も練習をせず部活を終えたのであった。

追試勉強会？（後書き）

久しぶりに和登場です。

gdgdになったかも……………

皆さんの感想お待ちしています。

追試後

明久と平沢の追試も無事終わり、今日は明久と一緒に帰っていた。

今日は明久の家で食事を食べに行くからだ。

これは追試の勉強で世話になったお礼らしい。

智也「もう7時か…」

明久「さすがにお腹へったね」

智也「だな。つてか本当に飯食えるのか？」

明久「昨日収入があつたから大丈夫だよ」

智也「いつもあるようにしろよ……」

明久は生活費のほとんどをゲーム費などに当てているので、食生活がひどかったりする。

最近水と砂糖と塩と油で過ごしていたらしい。

つてかそんなので生きていられるのはお前だけだぞ。

明久と買い物をしている中で俺は見知った人物を見つけた。

？「あつ」

どうやら向こうも気付いたらしい俺たちの方にやってきた。

見知った人物それは平沢だった。

憂「こんばんは。智也さん、明久さん」

妹の方の。

智也「ああこんばんは」

明久「こんばんは平沢さん。この前はお邪魔しちゃったね」

憂「そうですね。あっそれと明久さん。

私のことは名前で良いですよ。それだとお姉ちゃんとかぶつちやいますから」

明久「あっそうだね。じゃあ憂ちゃんだね」

憂「はいっ」

そう言つて笑う平沢妹。

憂「お二人は何してたんですか？」

智也「今日は明久が晩飯をごちそうしてくれるみたいだから、その
買い物だな」

憂「晩ご飯をですか？」

智也「ああ、この前の勉強のお礼だつてさ」

明久「智也には色々世話になっているからね」

憂「そうなんですか…」

そう言っただけにやら妹が考え込む。

そして…

憂「あの もし良かったら家で晩ご飯食べませんか？」

凄じ提案をしてきた。

智也「えっ？メシ？」

憂「はいっ 私、今日いつもより多めに食材買ったんで
どうしようかと思ってたんです。だから、お二人ともどうで
すか？」

首を傾げる平沢妹。

智也「だって明久どうする？」

明久「どうしようか？」

憂「あ、あの迷惑でしたら良いんです！

私が勝手に言い出したことですから…」

俺と明久が相談しているのを見て急に慌てだし、
最後にはションボリしだした。

智也（アレ？…このパターンは…）

そう思い周囲をグルッと見渡す。

そこには噂好きの主婦や仕事帰りのスーツ野郎、学生グループ、その他諸々が俺達を見ていた。

更には…

「見て！奥さん！あの人、女の子いじめてない！？」

「こ、これは…イケませんね…」

「おいおい、あのにーちゃんたち見てみるよ、あんな可愛い子泣かしてんぞ」

「最低だなアイツ…」

というとんでもない誤解をあたえていた。

更にはハタから見れば俺と明久が平沢妹を泣かしている状況に見えるらしい。

明久「なんかマズくないこの状況？」

明久の意見もごもつともだ。

俺は噂している人たちをギロリと睨む。

「ヒイツー！！」

「ヤベエ！コッチ見た！！」

「おいッ！逃げるぞッ！！」

一目散に逃げ出す。

それにより更にどよめきはしる。

そんなこの状況をなんとかするには…

智也「…わかった 行く…」

明久「じゃあ憂ちゃん。ごちそうになっていいかな？」

俺と明久が折れるしかないのだ。

まあ別に嫌じゃないわけだし、ただ迷惑じゃないかなと思ったただけだしな。

憂「えっ？良いんですか？」

明久「うん！」

シヨンポリ顔から一変、少し嬉しそうな表情をする。

智也「じゃあ行くござ…」

そう告げて早々に歩き出す。

憂「あっ はいっ！」

明久「あっじゃあ僕が荷物ぐらい持つよ」

歩き出した俺に駆け寄ってくる平沢妹。
そして妹さんから荷物を預かりその後が続く明久。
俺達は夕暮れの街を平沢家へ歩きだした。

憂「ただいま〜」

明久・智也「おじゃまします」

平沢家到着。

唯「おかえり〜憂」

妹が帰還を知らせると奥から姉がパタパタと参上した。

憂「ただいま、お姉ちゃん」

唯「あれっ？トモ君にアキ君？どうしたの？」

妹の横にいる俺と明久に気付き疑問の声をあげる。

憂「偶然会ってね。晩ご飯に招待したの」

唯「おお〜そうだったんだ〜ナイス！憂！」

憂「えっ？ あ、ありがとう」

何故かサムズアップする姉に少し困惑しながらも礼を言う妹。

何がナイスなんだ？

唯「まあ上がってよトモ君にアキ君！」

憂「どうぞ智也さん明久さん」

智也「…お邪魔します」

明久「お邪魔します」

ここまで来たからには引き返す事も出来ず平沢家に足を踏み入れる。

憂「それじゃあ すぐに晩ご飯の準備するね」

唯「は〜いっ」

明久「なら、僕も手伝うよ。これでも料理は得意なんだ」

憂「いいんですか？」

明久「うん！もちろんだよ！この前お邪魔したお礼させてね」

憂「じゃあお願いします」

智也「じゃあ俺も……」

明久「智也は平沢さんとゆっくりしてなよ。

今日は元々僕が智也にご馳走する予定だったんだから」

憂「そうですね。智也さんお姉ちゃんと一緒にいてくださいね」

智也「……ああ、わかった」

晚メシに招待され何もしないのは気が引けるので手伝おうかと思っ
たが
やんわり断られた。

唯「ねえねえトモ君！」

智也「なんだ？」

唯「コード教えて！」

何故かテンションが高い平沢がそう言うてくる。

床に座っている平沢を見ると

その横にレスポールと秋山が購入したサルコード（長いので省略）
があった。

どうやらコードを覚えていたらしい……ていうかそりゃそうだろ。

この前の追試勉強で覚えたコードを全てデリートしやがったんだか
らな。

部活以外の時間でも覚えてもらわなきゃ俺が報われん。

智也「…分かった とりあえず今まで覚えたコードを弾いてみる」

唯「了解！」

なんで敬礼？

.....

唯「これが『Dm』だっけ？」

智也「違う。そりゃ『F』だ。

つかそつちの方がムズいのに何でアツサリやってんだよ……」

唯「あつ こうだ！」

智也「『B7』だからなそれ」

平沢にコードを教えていると

明久「ご飯出来たよ」

明久と妹さんがご飯を運んできた。

憂「おつ ゴ・ハ・ン 今日は何？」

憂「ハンバーグだよ」

唯「ハンバーグ！？やったネ！」

智也「おおこれは美味しそうだ」

ギターレッスンを中断し晩メシを食べることに

憂「でも本当に明久さん料理お上手ですね」

明久「えっ？そうかな？小さい頃からやってたからね」

智也「明久は家事については凄いよな。家事以外はアレだけど……」

憂「でも、男の人でここまで料理が出来るなんて驚きですよ」

唯「それにおいしいよ〜憂！アキ君！」

明久「ありがとう平沢さん」

憂「ありがとうお姉ちゃん。あっ ほっぺたにソースついてるよ？」

唯「えっ ドコ？」

憂「動かないで拭いてあげるから」

唯「んっ」

憂「はい、もう動いていいよ」

唯「ありがとう〜憂」

憂「どういたしまして」

智也「……」

唯「あれ？どうしたのトモ君？食べないの？

食べないなら私が食べちゃっぞ？」

憂「ダメだよお姉ちゃん。それは智也さんの分なんだから」

唯「分かってるよ」冗談 「冗談」

憂「もう〜お姉ちゃんったら」

そう言っ互いを見て笑い合う姉妹。

本当に仲のいい姉妹だな。

そしてまた明久がブツブツ言いながら遠い目をしていた。

唯「それじゃあ、また明日、学校でねトモ君、アキ君」

憂「またいらしてくださいね智也さん、明久さん」

智也「ああ」

明久「うん！」

晩メシの後、平沢姉妹と談笑し、

明久と妹さんが後片付けしている間に、

もう少しギター練習をしておいとまする事に。

明久はその時に妹さんとメルアド交換をしたらしい。

そして平沢姉妹の事を名前で呼ぶようになった。

平沢が妹さんは名前なのに自分が苗字だったのが嫌だったらしい。

合宿？

（ある7月の放課後）

陽一「おっそうじ〜おそうじ〜たのしいなあ〜 …… って楽しくないわっ！〜！」

智也「やかましい黙れ！！お前の顔面で床でも拭いてろ！！」

陽一「そんなことするかア！！！」

本日太陽が照りつける7月中旬。

俺と陽一は放課後に2人だけで空き教室の掃除中だった。

理由は簡単、今日は週に1度の掃除当番の日。

そしてこの場所が俺達の班の掃除区域だからだ。

だが…俺達2人しかない。

通常1班4人体制なのだが都合悪く、2人病欠なのだ。

智也「はあ…」

ため息だつて出たくなる。

何が悲しくてこのバカと2人で掃除なんてしないとイケないんだ。

サボるかな…
智也

陽一「なあ智也」

智也「なんだあ？」

陽一「正直ダルくね？つうかサボらね？」

どうやら陽一も同じ事を考えていたらしい

智也「……そうだなサボるか」

陽一「だな。こんな空き教室掃除してもしなくても同じだよな。」

よしっ 行こうぜ！」

智也「…ああ」

珍しく意見が一致したので実行に移そうとした時…

山中「中川君、春原君、ちゃんと掃除やってる？」

教室のドアから我が校の音楽教師、山中教諭が顔を覗かせた。

陽一「あれ？先生何でここにいるんすか？」

智也「……」

山中「あなた達の担任の先生がね

『アイツらは真面目にやってないと思うので、様子見て来て

くれませんか?』

って言われたからよ。私もコッチに用事があったからね、そのついでに」

陽一「ぐっ…」

智也「……信頼ねえな俺達」

ってか人を派遣しないで自分で確認しに来いよ。

山中「それで真面目にやってたの?」

『今からサボろうとしてた』なんて事は言えず…

智也・陽一「もちろんですよ」

そう答えるしかないのだ…

山中「そう。それじゃキッチンと最後までやってね。私も手伝うから」

陽一「えっ!?! 先生もやるの?」

山中「ええ あなた達二人だけじゃ時間がかかりそうだから

…何か不都合でもあるの?」

智也「いや、そんなのないですよ!

先生が手伝ってくれるとは思ってなかったからつい、

なあ陽一?」

陽一「そうですよ!先生が手伝ってくれるのならたら百人力だぜ!!

山中「それじゃあ早く終わらせましょう。中川君は部活があるんだから尚更ね」

智也・陽一「はい」

結局、逃げ出す事も叶わず俺達は掃除をするはめになった。

.....

紬「智也君」

智也「ん？」

掃除終了後、陽一と別れ部活のために音楽準備室を
目指し歩いていると、後ろから琴吹に声を掛けられた。

紬「智也君も今から部室に行くの？」

智也「ああ。琴吹もか？」

紬「そうなのよ。今日掃除当番で遅れちゃって、智也君は？」

智也「俺も同じ理由だ」

紬「そうなんだ」

琴吹と本当にたわいもない話をしていると気が付けば部室の目の前に来ていた。

智也「お先にどうぞ」

紬「ありがとう」

今は必要がなさそうなレディーファーストを発揮し部室に入る。

ガラッ

紬「ごめんなさい。遅れちゃって」

智也「遅れました」

詫びをして入る琴吹と軽いノリで入室する俺。

すると、どうだろう中の様子は…

漣「……………」

律「うおお……」

唯「…痛そう了」

明久「うん……」

怒ってますという風に腕を組み仁王立の秋山と

正座をし頭を押さえる田井中、

同じく正座をして田井中を見る平沢と明久の姿がそこにはあった。

そんな状況を見て隣りにいる琴吹は…

紬「えつと…マドレー又食べる？」

智也「何でだよ！」

思わずツツコンでしまった。

………

智也「へえ合宿ねエ……」

全員着席し、琴吹が人数分のマドレーヌと紅茶を用意すると秋山が喋りだした。

なんでも軽音部の強化合宿を提案したが平沢と部長と明久が、
合宿〓遊び〓気分MAX になり全く話を聞かず、
更には秋にある学園祭に向けての合宿だと説いたが、

初めての高校の学園祭＋高まる期待。話が脱線になり
違う意味での火山が噴火したらしい。
ちなみに噴火の影響をモロに受けたのが部長である田井中だ。

漣「ムギと智也はどう思う？」

いくら慌てずやっていこうって言っても、

もう3ヶ月にもなるのに1度も合わせたことないなんて」

紬「まあまあまあまあ……」

智也「……そうだな。さすがにヤバイな」

そして俺は1度紅茶に口に含む。

とそこで琴吹が……

紬「行きましょう！！みなでお泊まり行くの夢だったの〜！！」

何やら、えらく興奮した様子で賛成1票を投じる。

その『みんな』は俺と明久も含まれてるんだろうか？

唯「そうなんだ〜」

律「じゃあ海にする？それとも山にする？」

漣「だから！！バンドの強化合宿って言ってるだろ！！」

律「冗談だつて〜」

漣「まったく！！はあく。智也はどう思う？合宿」

智也「そうだな…」

ここで部長に怒り、ため息で何とか気持ちを整理した
(気持ちはよく分かる) 秋山が俺に意見を聞いてくる。

そこで少し考え込む。

智也「……確かに秋山の言う通りだな。

軽音部が始動して未だに合わせたことがないというのは、
ハッキリ言って危機感を覚えた方が良くと思うぞ」

漣「うんうん。智也の言う通りだ」

律「おお…トモが真面目なことを…」

漣「律」

律「ゴメンナサイ…」

失礼な事を言ってくる奴を秋山が黙らせる。

智也「ここらで学園祭にむけて一遍

ビシッと気持ちを固めた方が良いだろうな。

平沢もある程度はギターを弾ける様になったんだ、
合宿ってのは悪くはないと思うな」

漣「流石智也だな！その通りだよ！」

俺の意見に感動する秋山。
苦勞してるなお前……俺もだけど。

漣「という訳で軽音部で夏休みに強化合宿を行います！
いいですね！」

唯「私は元々賛成だから」

律「もちろん私もOKだぜ！」

紬「私も私も」

明久「僕も」

次々に賛成してくる4人。

平沢と田井中、明久は本当に理解してるのか怪しいが……
それから1つ、言っておかなければならない事があったな。

智也「まあ、頑張ってくれ。俺と明久は不参加だな」

唯・漣・律・紬「……」

明久「えっ？僕も？」

時が止まった……

律「……ハッ！えっ？何言ってるの？」

智也「何がだ？」

律「合宿だよ！合宿！何で不参加なんだよ！」

田井中がいち早く回復し身を乗り出しながら俺に質問してくる。

明久「そっだよ智也。それになんで僕もなの？」

智也「じゃあ問題だ…平沢」

唯「はいっ 何でしょう？」

智也「俺と明久とお前等4人の違いは何だ？」

唯「え〜っと……………あつ！DNA！」

智也「そりゃそっだ。てか全人類がそっだ。不正解」

唯「ええ〜違うんだ…」

『DNA』って知ってたんだな。これはバカにしすぎか…

智也「琴吹わかるか？」

絢「え〜っと……………性別？」

智也「正解だ。後で田井中に何かおごってもらおうといい」

律「なんで私なんだよ！じゃなくて…それが理由か？」

智也「そつだ」

これが俺と明久が合宿不参加の理由だ。
何泊するのかしらんが1泊でもするのなら俺は行かない。
つてか行けない。

唯「え〜っ　なんで〜？」

平沢が疑問の声をあげる。分からないのかコイツは？

智也「…いいか。合宿つつうことは泊まんたる？

修学旅行みたいに大勢じゃねえんだ。

若い少人数の男女が監理者もなしに泊まれるわけないだろ」

明久「あつそついうことか〜なるほど〜」

つて明久お前も今わかったのか……

まだ理解していない様子の田井中と平沢に説明をする。

と、ここで……

漣「でも……」

智也「ん？」

黙っていた秋山が口を開いた。

漣「それじゃあ智也と明久の練習はどうするんだ？」

智也「それは、お前らが合宿から帰ってきてから合わせるし、もちろん2人で練習するさ。サボりはしないさ」

漣「それじゃあ合宿をする意味がないよ。

これは軽音部の強化合宿なんだから智也も参加しないとダメだよ」

智也「……」

確かにそうなんだが……

あれ？ おかしいな？

俺の中じゃ秋山は俺の意見に賛同してくれると思ったんだが…まさかの裏切りだ。

唯「そうだよサツくん！ 私たちはこの6人で『文月軽音部』なんだから！

トモ君とアキ君も行かなきゃダメ！」

紬「私は『みんな』で行きたいの。だから智也君も一緒にね？」

智也「……」

漣「それにやっぱり監視者なしで男女が行くのは危ないかもしれないが、

私は智也と明久なら大丈夫だと信じているからな」

律「そうだそうだ。漣と唯とムギの言う通りだ！

てゆうか部長権限で強制的に連れて行くからな！」

明久「ここまで言われたら断るなんていえないよね智也」

皆「……ジー……」

俺が口を開くのを待つ様に、10つの瞳が俺を凝視してくる。

智也「はぁ……」

確かに秋山の言い分は正論だ。

何より合宿を強く勧めたのは俺だし。

それに……

『この6人で文月軽音部』

そんな事言われちゃあな……

智也「……分かったよ。俺の負けだよ。行けばいいんだろ……」

白旗を振り降参……敗者決定、俺。

透「うんっ」

唯「やったー！」

紬「よかったわ〜」

律「こうしてサクは合宿に参加することになったのだった」

智也「なんでナレーション口調なんだよ……」

明久「まあいいじゃない」

智也「1つ聞いていいか？スタジオ付きの旅館とかあるのか？」

俺の合宿参加問題が解決した途端、俺の口から別の問題が発生した。軽音部の合宿なんだ、楽器の音を出しても問題なく合宿できる場所なんて限られてくる。

ましてや俺達は学生。

スタジオ付きの場所なんて借りる金は無いに等しい。

唯「私、お金ないよ？」

智也「ちなみに俺もそこまではないぞ」

漣「そ、それは……」

宿泊費まで考えていなかったんだろうな。秋山が口ごもる。

漣「ム、ムギ？」

紬「はいっ？」

秋山が琴吹に何やら話しかけていた。

漣「別荘とかあるか……」

智也「そんなのあるわけ……」

紬「ありますよ」

皆「」「」「あるんかい」「」「」

秋山が望み薄で琴吹に尋ねるとアッサリと返事が返ってきた。

それにより声が揃う俺達。

本当に琴吹って何者だ？本当にお嬢様だったりするのか？

琴吹の寛大な心で無事に合宿場所を確保する事が出来た。

合宿？

昨日夜中までゲームをしてて気付けば俺は目覚めていて、目の前には自分の部屋の天井が広がるだけであった。

…にしても暑いな。太陽はもう活動を始めているようだし。俺は枕元にある時計を見る。

7月30日 5:07

今日から軽音部の合宿日である

合宿の集合時間は8時。

ここから集合場所である駅まではゆっくり歩いても20分もあれば行ける。

つまり、余裕を持ったとしても軽く7時前までは寝られる計算となるのだ。

…よしもう一眠りしよう。

.....

現在時刻は5時半。

俺は今シャワーを浴びているところだった。

あれだけ汗かいたんだ、やっぱり朝のシャワーは気持ち良いぜ！

…結局あの後眠れたのかって？当然寝れなかった。暑いし。

.....

朝飯も済んだし荷物も全部準備できた。

ギターも持った！、服装も身だしなみもある程度と整えた。

俺は時間を確認する。 7時10分、まだまだ余裕はある。

.....やる事も無かったので、俺はもう集合場所に向かうことにした。

予想通り、集合場所である駅前の広場みたいな所には誰も来ていない。

7時30分 集合時間まであと30分はある。

俺は傍にある円形のベンチに腰を下ろし、

イヤホンを取り出して音楽を聴きながら待つことにした。

.....

暫くして、見覚えのある2人がこっちの方に向かって歩いているのが見えた。

… 見た感じ田井中と秋山だな。

俺はイヤホンを外し、2人に向かって軽く手を振った。

すると、2人もこっちに向かって走って来た。

智也「2人ともおはようさん」

律「よう、トモ！」

漣「おはよう智也。早かったんだな」

智也「まあ家にいてもする事無かったしな。

暇だったからさつき来たんだ。」

律「ふ〜ん。漣、今何時だったけ？」

漣「今……7時45分だけど」

7時45分…結構早いな。

正直ギリギリに来るのだとばかり考えていた。

漣「智也。唯とムギと明久は？」

智也「3人ともまだだな。明久からはもうすぐ着くってメールはあった。」

まあまだ待ち合わせまで時間はあるし、とにかく待つてようぜ。」

そう言っただけ俺たちは、さつき座っていたベンチで3人を待つことにした。

.....

その後、5分位経って明久と紬も到着した。

これであとは唯だけ……なんだが、その唯が不安でしようがない。

時間は刻一刻と過ぎていく。

時が経つにつれて、嫌な予感が確信に変わっていつているのが分かる。

律「なあ、漣。唯まだ？」

律がいきなりそう尋ねた。

漣「集合時間まであと2分あるんだ。その位待ってやれ」

紬「そうですよ。唯ちゃん、きっと来ますって！」

今日は大丈夫だよなアイツ……

そこへ

唯「皆、おはよ」

噂の張本人がやってきた。

時間は8時丁度かまあ遅刻したわけでもないしいいか。

律「唯、遅いじゃねえか？心配したんだぞ？」

唯「ごめんごめん。途中で荷物持ってくるの忘れてて〜」

明久「荷物忘れるって」

唯「エへへへっ」

智也「さて、じゃあ全員揃ったことだし行くか」

俺たちは切符を買い、

電車に乗って琴吹の別荘近くの駅まで向かった。

駅に着き別荘に向かって歩いていく。

潮風を感じつつ駅から5分程歩くと、

いかにもリゾートにありそうな感じの建物に到着した。

どうやらココが琴吹の別荘らしい。

大きさは…恐らく俺の住んでいるアパートよりもでかい。

これでもビックリなんだが琴吹曰く

『本当はもつと大きな所を借りたかったんだけど、

一番小さい所のここしか借りられなくて…』

と言うことらしいからまたビックリだ。…これで十分です。

正直、こんな所にタダで滞在しているのだろうか…？

俺は罪悪感丸出しで別荘の中に入った。

合宿？（前書き）

あけましておめでと〜っ！ございます。

これからも『バカとけいおん！』と召喚獣『をよろしくお願いします。』

合宿？

律「おおーほほーい。」

唯「わぁー、すっごーい。」

明久「…うわー。」

玄関の扉を開けると、海に見える広々としたリビングが広がっていた。

…俺は一瞬旅番組でも見ているんじゃないかと錯覚した。明久と律と唯の反応もこの手の番組にありがちなんだが、それ以上に部屋がすごく綺麗だ。

智也「……本当にタダで泊っていいの？」

俺は恐る恐る確認してみることにした。

琴吹「もちろん！だって別荘ですし…」

琴吹には本当に感謝しなければならなかったと感じた瞬間であった。

漣「…ん？これは……。」

どうやら漣が何かに気付いたらしい。

智也「どうした？」

漣「ほら、これ…」

秋山の指差す方を見てみると、高そうな果物が盛られた器があった。高そう…というか見たことないようなモノまであるな……。

紬「あつごめんなさい。」

何もしておかなくていいって言うておいたんだけど……」

智也「え？」

俺は思わず声を発してしまった。

他にも、大富豪の家にありそうな天井付きのベッドがある部屋があつたり、

冷蔵庫には高そうな食材が鮮度を保った状態で入っていたり、

……ああこの家には俺たちが到底味わえないような世界が広がっている。

そして、なんでだろう。俺の住んでいる環境がちっぽけに見えてきた……。

紬「どっぞ」

紬に案内されて俺と秋山と明久はある部屋に入った。

そこにはドラムやアンプ、それにマイク

……そう、バンドの練習には欠かせない機材が置いてあつたのだ。

琴吹の言っていたスタジオとは多分この部屋の事だろう。

海岸に面していて雰囲気もなかなか洒落ている。

……うん、最高の練習場所かも。

紬「しばらく使っていないから、ちゃんと動くかどうか心配だけど……」

俺はマイクを、秋山はアンプを確認する。

マイクもアンプも大丈夫だった。

智也「…ん？平沢と田井中は？」

明久「そういえば途中でいなくなっちゃったみたいだけど……」

そういえばどっか行ったな、あの2人。

まあ、あとで来るだろうからいいか。

漣「全く…しょうがないな……。」

溜息交じりに呆れていた漣はバッグの中から何かを取り出していた。

バッグの中から現れたのはラジカセだった。

明久「何コレ？」

漣「ああ、コレ？」

そう言うと漣はラジカセの再生スイッチを押し、ラジカセを床の上に置いた。

すると、どこかのロックバンドのものであろう演奏が流れてきた。

漣「昔の軽音部の学園祭でのライブ…この前部室で見つけたんだ」

智也「すげえ……」

俺たちは言葉を失っていた。

紬「…私たちより相当上手い」

漣「なんか…聴いてたら、負けたくないなって……」

明久「それで合宿って言い出したんだね」

いくら平沢が初心者だからって、

もうあれから3ヶ月は経とうとしているのだ。

文化祭も迫っているし、そろそろみんなで合わせてもいい頃だろう。

だが、俺たちは残念ながら1回も合わせて演奏をしたことがない。

紬「……負けないと思う、私たちなら」

智也「…俺もそんな気がするな」

…なんでこんな事が言えるのかは自分でも分からなかった。

それは、今の秋山を励ます為でも何でもない。

ただ、本当にそんな気がしたただけだったのだ。

そう思った矢先であった。

律「よおうし、遊ぶぞー！ー！ー！」

唯「オー、イエース!!」

勢いよくドアの開く音がした…かと思えば、遊ぶ気マンマンの2人がそこにいた。

…その証拠に、すでに水着を着ている。

さらに、平沢はビーチボールを、

田井中はモリ（コイツ、黄 伝説でもする気なのか…？）を構えていた。

漣「ちよつと待て！練習は…！？」

唯「先行っているから、4人とも急いでねー」

秋山の思いも虚しく、平沢たちは早くも海へと行ってしまった。

漣「…これでも…？」

秋山は2人の行動に完全に呆れて果てていた。

智也「……………」

俺は何も言えなかった……いや、言う気が起こらなかった。

律「おーい」

唯「早くー!!」

既にバカンスな2人の呼ぶ声がする。

紬「ちよつと待って……すぐ行くからー」

明久「少し待っててすぐに行くから」

ちよつと待て、明久も琴吹も遊ぶ気なのか？

紬「行こ、漣ちゃん、智也君」

漣「え！？ムギも遊ぶの？」

俺はどうしたらいいのかわからない。

紬「せっかく来たんだし、少しくらいなら…ね？」

そう言った紬は満面の笑みを浮かべていた。

明久「少しなら良いんじゃないかな？」

2人完全に遊ぶ気だ…どうすれば…。

漣「でも…私は…。」

紬「…じゃあ先行ってるね。私、待ってるから」

明久「僕も行ってらね」

そう言っつて、明久も琴吹も行ってしまった。

スタジオに残されたのは、俺と秋山だけ。

俯き加減の秋山の顔を覗くと、目に涙を浮かべているのが分かった。

漣「…なあ智也、私どうしたらいいの……?」

智也は声を震わせてそう言うと、その場に座り込んでしまった。その肩は小刻みに震えている……多分、泣いているんだろう。

俺がもし秋山の立場なら、4人にブチギレしているかもしれない。

秋山の思っている事がなんとなく分かった気がした。

俺は秋山の傍に座った。

智也「俺だって分からない。

でも…さっき、昔の軽音部に『負けなと思う』って言ったよな?」

秋山は俯きながらもこくりと頷いていた。

智也「確かに、昔の軽音部は上手いよ。

俺だって一瞬プロがやっているものかと思ったぐらいだし。

…けどさ、勝つ為には技術面だけじゃ足りない気がするんだ。

>チームワークくってモノが無ければ、何だって決して上手くは見えない。

…俺たち6人で力を合わせて全力で演奏する

そうすれば、自ずと結果は出てくると思うんだ。」

漣「智也……」

智也「確かに明久たちは遊びに行ったけどさ…」。

要はメリハリを付けて練習すればいいんじゃないか?

例えば、朝と夕方は練習して昼と夜は思いっきり遊ぶ

……みたいな感じで。ずっと練習じゃ疲れるだろ。

少しならリフレッシュってことで良いんじゃないかな」

そう言っただけは立ち上がった。そして、海岸の方を見る。やっぱり、平沢たちは楽しく遊んでいるようだった。

智也「見てみるよ、アイツらは楽しそうに遊んでいるじゃないか。

きっと楽しいぜ、こうやってみんなで遊んだら」

言ってる俺も遊びたくてウズウズしているのが分かった。

智也「それにさ秋山は1人で溜め込みすぎなんだよな。

こういうことは1人で溜め込まないで、

相談すればいいよ。相談事なら俺も一緒に考えるしさ。

まあいい案が出るかは別だけど……って言ってるなんか恥ず

かしいな／＼／＼」

漣「智也……」

智也「ん、なんだ？」

漣が顔を赤らめながら、何かを言いたそうにしていた。

もうその目に涙は無かった。

漣「その………ありがとう。」

漣はそっぽを向いて、俺にしか聞こえないような声でそう言った。

智也「よし！じゃあ俺達も行こうぜ！！」

そう言っただけ、俺たちは海へと繰り出して行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4050z/>

バカとけいおん！と召喚獣

2012年1月1日00時58分発行